

東照軍鑑

十七之十八

共貳拾冊

288
ト3
11A



東照記卷第十七目錄

明治十九年
八月點查章



織田信孝柴田勝家生害事

岡崎十九御番被仰付事

源君與北條氏政御對面事

松平康親病死事並丹羽氏次屬麾下事

駿州臨濟寺再興事

源君御息女北條氏直御輿入事

源君御任官並諸家中武士書立事

秀吉信雄鉾權事

源君信雄御加勢事付羽黑合戰事



A288



東照記卷第十七

織田信孝柴田勝家生害事

天正十一年癸未正月廿三日羽柴秀吉五万餘騎ヲ馳
催シ滝川一益ヲ攻徒ントテ勢州へ打出テ一益カ甥
滝川儀太夫指籠ル峯ノ城手寄ナレバ先懸ノ勢ヲ以
テ取圍セ長嶋表ヲ押へ佐治新从カアリシ龜山ノ城
へ押寄攻扱ニシテ請取り織田信雄ヲ迎入レ扱テ峯
城ヲモ攻破ントセシ所ニ越州ノ柴田勝家滝川ヲ救
ン為メ貳万余騎ヲ引卒シ江北へ致發向ノ由注進ア
リケレハ秀吉大ニ驚テ峯城塙柵如何ニモ丈夫ニ付
廻シ信雄ノ人數並蒲生忠三郎氏郷長谷川藤五郎秀

一其外義濃近江ノ寄合衆ヲ攻手ニ殘シ二月八日江
別長濱へ趣キ其ヨリ志津嵩ニ出張シ敵ノ此ヲ見考
ルニ急々攻破ツヘウモナク又敵取懸可交勝負躰ニ
モナケレハ爰ニ取出ヲ築キ本山ニ柴田伊賀守勝豊
カ人數東野ニハ掘久太郎秀政志津嵩尾崎ニハ中川
瀨兵衛尉清秀其尾七八町程モ隔テ高山右近志津嵩
城ニハ羽柴義濃守秀長田上山ニハ羽柴小一郎秀勝
木ノ本ニハ蜂須賀彦右工門生駒甚介赤松弥三郎神
子田半左工門明石与四郎小寺官兵衛尉ナトヲ遊軍
トシテ殘置弱キ所アラハ可助勢ノ由ナリ海津口押
ニハ丹羽五郎左工門尉長秀ヲ指置秀吉ハ諸勢休息

ノ為メ長濱へ被引入ケリカ、ル處ニ織田信孝柴田
滝川一味ノ事ナレバ手合トシテ稻葉一鉄氏家内膳
正ガ領分ノ在々所々放火シ給フ由告来リシカバ秀
吉旧冬可討果者ヲト悔ナカラ四月十七日大垣ニ至
テ岐阜ノ城ヲ攻ント支度セラル、處ニ佐久間玄番
允柴田勝家ニ内談シテ田上山本山兩城押ニハ前田
又左工門尉利家父子志津嵩ノ押ニハ原彦次郎安井
左近太夫東野ノ取手ヲバ勝家ニ押サセ不破彦三郎
徳山五兵衛佐久間久右工門ヲ先手トシテ七千餘騎
ヲ引具シ同廿日志津嵩尾崎ノ要害ヲ打圍メハ中川
清秀大垣へ羽檄ヲ飛セ出戦シケルガ多勢ニ無勢ナ

レバ終ニ切負討レケリ玄番允清秀カ首ヲ取テ勝家
へ遣シケレバ不斜悦ニ早速引取候へト再三使ヲ越
ケレ共勝ニ乘テ其陣取ケル秀吉中川カ方ヨリノ
注進ヲ聞キ取ル物モ取敢ズ志津嵩へ懸付所々ノ取
手へ牒シ合セ夜ノ明ルヲ被相待ケル玄番允柴田ガ
下知ヲ不用罷有ケルが大垣ヨリ多勢ノ向フ由ヲ聞
テ早々夜明方ニ引取ントスル處ヲ秀吉取手ノ勢ト
揉合セ嚙留ケル玄番允追拂退ントセシヲ前田利家
兼テ秀吉へ心ヲ通シ裏崩スレバ有繫ノ玄番允モ不
叶敗走ス秀吉麾ヲツ取り懸レ者共ト下知シケレバ
小姓馬回ノ若侍我劣シト懸出ス中ニモ福嶋市松加

藤虎之助同孫六糟屋助右エ門平野權平片桐助作股
坂甚内ナド眞先ニ進テ北ル敵ヲ追懸ケル勝家前田
ガ裏崩玄番允敗軍ヲ見テ其終乘込ントセシヲ毛受
勝介諫メテ金ノ五幣ノ馬印ヲ預リ退ケ小高キ所ニ
五幣ヲ押立無比類勸討死スレバ人皆柴田ト思ヘリ
勝家ハ其間ニ北庄へ引籠ル秀吉弥競懸テ愛宕山ニ
旗ヲ立テ被攻所ニ勝家が子柴田權六並佐久間玄番
允ヲ生捕来ル間此由角ト城中へ告ク柴田カヲ落シ
同世四日天主ニ火ヲ懸ケ腹搔切テ失ニケリ秀吉遂
本望此上ハ織田信孝ヲスカシ出害セントテ舎弟義濃
守秀長ヲ大将トシテ五千餘騎信雄ノ勢ヲ加へ岐阜

ノ城へ指向ケ攻扱ニシテ信孝ヲ尾列野間ノ大御堂
寺へ遣シ跡ヨリ富田平右エ門古田彦三郎ヲ討手ニ
越シケレバ信孝欺レ出城シタリト後悔セラレケレ
共甲斐無リケル頓テ太田新右エ門ト云者ニ舛錯セ
サセ五月二日切腹シ給フ辞世ニ云ク

昔ヨリ主ヲ内海ノ野間ナレバ報ヲ待テヤ羽柴
筑前

誠ニ秀吉ハ惣見寺殿ノ取立ナルガ其恩ヲ忘レ如此
仕合行末墓々敷事アラシト申ケリ秀吉今度裏崩ノ
忠賞トシテ敵方ナレ共前田利家ニ兼領能登並加州
金澤ノ城ニ石川川北兩郡ヲ指漆与ヘケリ丹羽長秀

ハ無二ノ忠節人ナリトテ越前若狹加州ノ内能義惠
那二郡ヲ遣シ江列坂本ノ城へ歸陣有テ淺野弥兵衛
尉長政ヲ召寄柴田權六佐久間玄番允ヲ害セヨト被
申付ケレバ洛中ヲ引渡シ六条河原ニテ首ヲ刎ケリ
秀吉上洛シテ任參議大坂ヲ居城ト定メラレケレバ
信雄モ居ナカラテ中將ニ叙セラレ滝川ヲ亡ントシ給
フ信孝勝家生害アレバ一益防戦叶間敷ト思惟ヲ回
シ羽柴ニ属セント頼寄リケル元来秀吉中ヨカリケ
レバ信雄へ内談シ一命ヲ助ケ領地悉ク令没収長嶋
ノ城信雄へ渡サセ滝川ニハ江州南郡ニ於テ扶持方
領少々与ヘ重テ忠勤アラバ大禄ヲ可遣ト約諾シ大

坂ニ引付被置ケリ

岡崎二ノ九御番被仰付事

閏正月九日源君江尻ヨリ本多重次ヲ召シ三州岡崎
二ノ九只今迄ハ平岩親吉ニ預置ケレ共甲州ノ郡代
ニ申付ルナレバ汝替トシテ罷越シ万事石川伯耆守
ト申合セ上方表ヲ可相押ノ旨被仰付ケレバ岡崎二
ノ九ヲ請取り有之ケル扱又江尻ハ天野三郎兵衛阿
部弥一郎兩人ヲ被遣為御目代黒田半右工門多々内
又市郎板倉四郎右工門ヲ指添置キ給フ

源君與北條氏政御對面事

二月十日北條氏政朝比奈兵衛尉ヲ濱松ハ指越シ去

ル年縁邊組約諾仕リ候ハ共國乱ニ付キ雙方不得寸
暇嫁嫁ノ儀只今迄延引非本意候然者来月中旬駿豆
兩國ノ堺ハ出テ致對面弥申合セ與入ノ日限ヲモ相
定度旨委細被申達ケル源君尤ノ由御返事有テ同三
月十二日駿河國沼津ニ着城アツテ西尾小左工門尉
ヲ御使トシテ是迄令參駕ノ由被仰越黄瀬川ノ端ハ
打出給フ氏政モ兼テノ定メナレバ黄瀬川ノ八幡林
ニ日カザシヲ構ハ朝比奈ヲ以テ被招ケル源君呼ニ
不行ハ臆シタルニ似タリトテ川ヲ御越アレバ氏政
三嶋ヨリ出向ヒ御手ヲ取テ借屋ノ内ハ請シ入様々饗應
セラレケル源君ノ御家老酒井忠次大氣ノ男ナレバメ

ズ不憚指出テ座ヲ持ケル北條家ヨリモ氏政ノ弟義
濃守氏規立出テ御挨拶ヲ仕ル彼等二人ハ去年新府
御陣ノ和睦御縁邊組ノ契約彼是取扱ケル故互ニ被
召連ケルトナリ八幡神主岩崎三郎左エ門罷出テ兩
将ハ御目見仕リケル西尾小左エ門内田全阿弥ナド
ヲモ呼出シ氏規ニ付置レシ朝比奈兵衛尉ヲ指加ヘ
上ヲ下ヘト宴^{ウツミ}リ氏政數盃ノ上松ノ枝ヲ舞出シ酒井
指ゾ聞及タル海老^{ウミエ}救^{スセ}川^{カハ}ヲト所望セラレケレバ其終
立テ囃サレシバシ徘徊シテ舞納メケル華モ實モア
ル酒井ナリトテ氏政喜悅ノ余リニ腰ヨリ負宗ノ服
指ヲ抜テ被^レ出ケレバ源君救ヒ當夕リト歡笑シ嫁嫁
ノ日限ヲ極メ立分レ給フ無程為謂入小田原ヨリ松
田憲秀ヲ被指越ケレバ色々御馳走有テ備前景光ノ
御腰物ヲ被^レ下御返シアリ

松平康親病死事並丹羽氏次屬麾下事

六月十七日駿列沼津ノ城代松平周防守康親病死子
息左近康重十六歳若輩ナレ共御預ノ衆小笠原三九
郎松平越中守其外武功ノ者數多アリケレバ如前々
沼津ノ城ニ被指置北條家ヲ押サセ給ヒケル則改名
シテ周防守ト申ケリ然ル所ニ織田信雄ノ旗下尾列
岩崎ノ城主丹羽勘次氏次同息勘六郎ヲ引連レ濱松
へ来リ源君へ申上ケレハ織田信孝ト一味ノ由讒言

ニ逢テ信雄ノ氣ニ背キ岩崎ヲ立出シ召城悉ク被打
破候兼テ御目ヲ被下三列乙尾一色赤羽根三ヶ村老
父右近入道道加讓トシテ被仰付道加ニ御扶持方ノ
御アテガヒ重々ノ御恩難報謝存シ是迄参上仕候似
合敷御役儀モ御座候ハゞ被仰付可被下ノ旨申上ケ
レバ源君聞召シ能モ参タルトテ榊原康政ガ組下ニ
被仰付事外ノ御念頃ニテ上方ノ様躰一々聞キ給ヒ
若シ御上洛被成候ハゞ尾濃兩國ノ案内者ニ被成ト
宣フ

駿州臨濟寺再興事

八月二日駿州臨濟寺御建立ノ事四辻大納言公遠正

親町院ノ御奉書ニ添状ヲシテ本多作左工門尉吉田
如雪齊ヲ以テ源君へ指上ケルハ御奉書ノ趣キ奉畏
ノ由公遠迄御返檄アリ又臨濟寺住持東谷和尚へモ
震翰ヲ被下ケル間如雪齊ヲ頼ニ臨濟寺御再興奉仰
ノ由被申上ケレバ無程御普請被仰付如雪齊ヲ召シ
臨濟寺代々住持ノ事御尋アレバ委曲申上ケル
臨濟寺住持代々ノ次第

臨濟開山前住妙心特賜圓滿本光国師大和尚

此大林國師ヨリ本寺妙心寺紫衣之地ニ罷成候由

申傳候遷化天文十八年己酉八月廿四日

臨濟創建開山前住妙心勅謚寶珠護國禪師大和尚

是ハ大原和尚之禪師号也大原ハ雪齊之事生國駿河也示寂弘治元年乙卯十月十日

臨濟第三世當住東谷和尚 生國駿河也

奉書云

耳はうは玉にんさいもの
おんてう乃ちよくきん
去さいあきまのまはきん
き川とほいとうとやま
付られうる魚川とま
おやうのうん其る
し

こく川左京の大姫との

添状云

雖未申通候令啟候抑駿列臨濟寺之事先皇様勅願寺異于他靈場候先年武田入國之刻伽藍炎上候間則被仰出再興候然者春中又炎上由候間建立之儀貴殿江御奉書候同東谷和尚江親王様被成御筆候於其國勅願寺限一ヶ寺事仁候間僧衆堪忍万端馳走候者弥可為武運長久基候猶如雪齋本多作左工門尉兩人江申候可有傳達候恐々謹言

八月二日

公遠

徳河殿

宸翰云大竜山臨濟寺者為後奈良院

勅願所本光國師開山護國禪師
創建也近年伽藍罹于兵火命國
司漸可企再興者也

八月四日

御判

東谷和尚禪室

源君御息女北條氏直御輿入事

九月廿一日源君ノ御息女相州小田原北條氏直へ御
輿入アリ是ハ三州西ノ郡鷄殿腹ノ御子御義丸ノ為
ニハ御姉ナリ駿豆兩國ノ堺黄瀬川ニ於テ御輿ノ請

取リ渡シ有ケル酒井忠次天野康景御輿ニ付參シケ
レバ北條家ヨリハ松田尾張守山角紀伊守出テ、御
輿貝桶ヲ請取ル御息女ノ伯父鷄殿藤助御家老トシ
テ小田原へ指添遣シ給フ彼ハ鷄殿長持次男藤助入
道一庵ガ子ナリ是ヨリシテ北條家ト縁者ニナリ給
ヒ互ニ入魂被成ケル

源君御任官並諸家中武士書立事

十月五日源君叙正四位下同日左近衛中將ニ任ジ
王ヲ去年甲斐信濃御手ニ入り駿河遠江三河合テ五
ヶ國ヲ領シ忠勤ノ輩ニ人數足輕ヲ預ケ加増ノ地ヲ
賜リ濱松ニ詰サセ又堺目ノ城ヲモ守セ置レケル衆

並羽柴秀吉北條氏政織田信雄ノ自國家中ノ者共ヲ
モ悉ク書立サセ御覽シ玉フ

源君甲信駿遠三五ヶ國城主次第

- 一 三州吉田城主 酒井左衛門尉 御家老
- 一 同岡崎城主 石川伯耆守 御家老
- 一 同苧屋城主 水野惣兵衛尉
- 一 同田原城主 本多豊後守
- 一 同作手城主 奥平九八郎
- 一 同櫻井城主 松平内膳正
- 一 同長澤城主 松平上野介
- 一 同西尾城主 酒井与四郎

- 一 同深溝^{フナツ}城主 松平主殿助
- 一 同形原城主 松平紀伊守
- 一 同上郷城主 松平因幡守
- 一 同野田城主 菅沼新八郎
- 一 同足助城主 鈴木兵庫助
- 一 同小原屋敷城主 鈴木紀伊守
- 一 同二連木屋敷城主 松平孫六郎
- 一 同細川屋敷城主 松平源次郎
- 一 遠刈懸川城主 石川日向守
- 一 同横須賀城主 松平五郎左工門
- 一 同二股城主 大久保七郎右工門

一同久野城主	久野三郎左衛門
一同堀江城主	植村庄右衛門
一同駿列沼津城主	松平周防守
一同長久保城主	牧野右馬允
一同江尻城代	天野三郎兵衛
一同高國寺城主	松平玄番允
一同田中城主	高力与左衛門
一同甲列郡代府中城主	平岩七ノ助
一同屋村城主	烏居彦右衛門
一同信州上田城主	真田安房守
一同小室城主	芦田源十郎

一同伊奈城主	菅沼小太膳
一同深志城主	小笠原右近大夫
一同松尾城主	小笠原掃部助
一同飯田城主	保科彈正
一同諏訪城主	諏訪安藝守

濱松詰衆寄合衆

柳原小平太	本多平八郎
井伊兵部少輔	本多作左衛門尉
柴田七九郎	内藤三左衛門尉
本多彦八郎	岡部次郎右衛門
西郷彈正	菅沼藤藏

松平伊豆守
西尾小左衛門
阿部弥市郎
設樂兵庫頭
三浦監物
松平次郎右衛門
高木主水正
青山藤七郎
中安彦次郎
鷲殿八郎三郎
權太織部

三宅惣右衛門
牧野半右衛門
松平弥三郎
戸田三郎右衛門
松平善兵衛
内藤四郎左衛門
本多弥八郎
柳原隼之助
大澤兵部
服部權太夫
阿部善兵衛

渡邊半藏 足輕廿八人預
水野太郎作 同上
柳原小兵衛 同上
加藤喜助 同上
嶋田次兵衛
服部半藏 足輕五十人預
但伊賀忍之者也
寛勘右衛門 御旗奉行

大久保次郎右衛門 同上
柳谷弥五助 同上
渡邊弥之助 同上
高木九助 同上
森川金石衛門 同上
渡邊半十郎

羽柴秀吉領分山城大和和泉河内攝津近江美濃
伊賀若狹越前加賀能登越中丹波丹後但馬因幡
伯耆播磨美作備前淡路南伊勢以上廿三ヶ國也
右内幕下持國家人居城之次第

一丹波一國

羽柴御次ツキ丸

信長五男
秀吉養子也

一但馬幡磨兩國

羽柴美濃守

秀吉
舍弟

一越前若狹加賀半國

丹羽五郎左衛門

一能登加賀半國

前田又左衛門

一越中

佐々内藏助

一備前美作

宇喜田八郎

一大和一國

筒井四郎

一丹後一國

長岡越中守

一勢州安濃津城主

織田上野介

一濃州大垣城主

池田勝入

一同岐阜城主

池田紀伊守

一同金山城主

森武藏守

一同曾根城主

稻葉一鉄

一同多藝タギ城主

丸毛兵庫頭

一同郡上グジュウ城主

遠藤左馬亮

一江州勢田城主

杉原七郎左衛門

一同日野城主

蒲生忠三郎

一同坂本城主

淺野弥兵衛

一同佐和山城主

堀久太郎

一同比田城主

長谷川藤五郎

一同高嶋城主

加藤作内

一若州佐柿城主

木村隼人正

一 同高濱城主 堀尾茂助
 一 幡州三木城主 前野庄右衛門
 一 同龍野城主 蜂須賀小六
 一 同廣瀨城主 神子田半左衛門
 一 因幡取鳥城主 宮部善祥坊
 一 同鹿野城主 龜井新十郎
 一 淡路刈本城主 千石權兵衛
 一 同岩屋城主 間嶋右兵衛
 一 伯刈羽衣石城主 南條勘兵衛
 北條氏政分國伊豆相摸武藏安房上総下総上野
 下野都合八州也幕下城主家人次第

一 安房一國 里見太郎義頼氏政 幕下
 一 下野那須 寄合衆氏政 幕下
 一 武州八王寺城主 北條陸興守氏政弟
 一 同鉢形城主 北條安房守氏政弟
 一 豆州蕪山城主 北條義濃守氏政弟
 一 上野佐野城主 北條左衛門佐氏政弟
 一 武州小机城主 北條右衛門佐氏政弟
 一 同岩付城主 太田十郎氏政子 太田源五郎養子
 一 同川越城主 大道寺駿河守
 一 同忍ノ城主 成田下総守
 一 同松山城主 上田安德齋

一同江戸城主
 一同津久居城主
 一上列小幡城主
 一同笠輪城主
 一同安中城主
 一同立林城主
 一同新田城主
 一上総土氣城主
 一同東金城主
 一下総臼井城主
 一同佐倉城主
 遠山右衛門太子
 内藤左近太夫
 小幡上総介
 内藤大和守
 安中左近太夫
 長尾新五郎
 由良信濃守
 酒井伯耆守
 酒井左衛門
 原式部大輔
 千葉大膳入道

一同小金城主
 一同關宿城主
 一相列其繩城主
 一上野高崎城主
 一同倉加野城主
 一下野皆川郷主
 皆川山城守
 高木下総守
 梁田次郎
 北條左衛門太夫
 和田左衛門
 倉加野淡路守

小田原詰衆寄合衆

松田尾張守家老
 芳賀伯耆守
 小笠原幡磨守
 太田肥後守
 山角上野介家老
 山角紀伊守氏直家老
 伊勢備中守
 芳賀伊豫守

石卷勘解由	伊勢大和守
北條新八郎	布施善四郎
依田下總守	山中大炊助
朝倉右京亮	神尾弥兵衛
幸田大藏	南条山城守
石卷下野守	大森甲斐守
大藤左衛門尉	山中主膳
福嶋伊賀守	清水太郎左衛門
梶原肥前守	
<small>海賊頭</small>	
織田信雄領今尾刈一國北伊勢五郡ナリ家人居	
城ノ次第	

- 一尾刈蟹江城主 佐久間駿河守
- 一同星崎城主 岡田長門守
- 一同犬山城主 中川勘右衛門尉
- 一同苅安賀城主 淺井田宮丸
- 一同黒田城主 澤井左衛門
- 一勢州松ヶ嶋城主 津川玄番允

秀吉信雄鉾榎事

十一月十七日羽柴秀吉前田玄以齋ヲ以テ織田信雄大坂へ可有參勤ノ旨被申遣ケレバ信雄聞キ給ヒ城ノ外殿若君十五歳ニナラセ給フ迄天下ノ裁判予一人ノ計タルベキ由各寄合相定ル處ニ其口舌モ不乾

内ニ早大坂ニ相詰メヨトハ奇恠ノ仕合ナリ秀吉惣
見寺殿ノ厚恩ヲ報ニ若君ヲ守リ立ント思フナラバ
如例年安土へ参上シテ若君へ年暮ノ祝禮勤仕可然
昔返事アレバ秀吉大キニ怒リ信雄ハ若君ノ傳ニテ
コソアレ秀吉ハ天下ノ執權ナリ角申出上御上洛遅
引ナラバ急度御迎ニ可参ト重テ玄以齊ヲシテ被申
ケレバ信雄其鋒ニ當リ叶間敷ト思ヒ委細得其意ノ
由申遣シ安土ヲ引拂ヒ尾刈長嶋ノ城ニ至テ池田勝
入父子丹羽五郎左工門尉佐々内藏助細川越中守堀
久太郎前田又左工門尉森武藏守若名勝藏長谷川藤五郎
竹若名ナド方へ使札ヲ指越シ不寄何時秀吉ト取合刻

可有加勢ト被頼ケレ共時世ヲ考へ不應其意秀吉ニ
与シケリ其中ニ尾刈平ノ佐人佐々内藏助成政計リ
亡君ノ事ヲ思テ信雄ニ随フ是ハ越中ノ國主ナレバ
加賀越前へ働キ折ヲ得切テ上シノ由ナリ信雄惣見
寺殿ノ重恩ヲ蒙リタル輩多ケレバ其ヲ頼トシ秀吉
ニ敵對アレ共皆々与シ申サ子バカヲ落シ此上ハ濱
松ノ家康ヲ頼ムヨリ外ノ事ナシトテ天野周防守土
方勘兵衛兩使ヲ以テ徳川殿助勢奉頼ノ由被申ケル
源君若キ時ヨリ信長ト別テ入魂スルノ間此度ノ儀
見次候ハン旨御返事アリケレハ信雄百千ノ将ヲ求
タルヨリ頼母敷ト悦ヒ一左右次第御出馬可被成由

示合セ上方ノ様躰ヲ被聞合ケリ

源君信雄、御加勢事、舟羽黒合戰事

天正十二年甲申正月上旬織田信雄上方表押トシテ
勢州峯ノ城ヲ拵ヘ番勢ヲ被蓋置ケル秀吉近隣ノ諸
將悉ク打靡ケ人質ヲ取り同二月ノ始ノ江州へ出張
兼々懇切セラレツル信雄ノ家臣岡田長門守津川玄
番允淺井田宮丸滝川三郎兵衛ニ尾州一國北伊勢五
郡可宛行由朱印ヲ出シ折ヲ得信雄ヲ可討果ト誓紙
ヲ書セ竊ニ勢州へ人數ヲ出シ峯ノ城ヲ攻サセケル
城ニハ佐久間駿河守ヲ大將トシ中川勘右エ門尉関
甚五兵衛天野周防守小坂孫九郎山岡道阿弥等四千

餘騎ニテ楯蓋リケルガ坐ナガラ敵ヲ待シヨリハ出
張シ防ント城外へ打テ出備ヲ立レハ堀久太郎秀政
蒲生忠三郎氏卿長谷川藤五郎秀一其外小身ノ侍都
合一万有余ノ勢一度ニ嚙ト突テ懸リ城内へ追込ケ
ル関甚五兵衛モリ返サント麾ヲツ取り諸率ヲ下知
シ戰ニ終ニ奈村百右エ門ト云者ニ討レケリ其外ノ
者共匍々ノ躰ニテ城中へ逃入り口々ヲ堅ル處ニ長
嶋ヨリ目根野久三郎ニ足輕二百指添越給フ各是ニ
カヲ得弓鉄炮ヲ放サセ爰ヲ先途ト防ケレバ上方勢
攻落事不叶關ヲ討タルヲ勝トシテ江州へ引返ケリ
秀吉近日大勢ヲ催シ尾州へ可相働トテ大坂へ早々

歸城アレバ信雄モ峯ノ番手ヲ引城ニハ中川勘右衛
門日根野久三郎兩人ヲ被入置ケリ然ル所ニ滝川三
郎兵衛勝雅ツク々々ト思案シテ秀吉大祿ヲ可宛行
由誓紙ヲ取リ替シ候ヘ共主君ヲ討奉ル事天命恐ア
リトテ竊ニ信雄ヘ告知セケレバ不斜感悦シ知ラヌ
顔ニテ逆徒ヲ呼ニ遣シ岡田ヲバ土方勘兵衛淺井ヲ
バ森久左エ門津川ヲバ飯田半兵衛尉ヲ討手ニ被云
付ケリ土方強カノ長門守ヲ請取リ若シ仕損シテ
ハトテ室中ヘ閉籠リ夜物ヲ相手トシ飛懸々々突キ
ケレバ妻子等氣違タルカト驚キケル右ノ者共召シ
ニ從ヒ三月二日長嶋へ來レバ翌日饗應有テ秀吉

ト取合ノ儀相談シ岡田ヲ天主ヘ招キ泉州堺ヨリ來
ルトテ威風ノ鉄炮ヲ見セラレケル長州取上ケ一覽
ノ處ヲ土方飛懸リ組突ニ突ク岡田筒ヲ捨テ脇指ヲ
拔テ土方が眉間ヲ切りケレ共後ヨリ抱レ逆手ナレ
バ死スル程ノ疵ニアラズ信雄刀ヲ以テ放セ切ント
宣ヘバ大事ノ仕者ニテ御座候間私共ニ被遊ヨト答
ケレ共突放サセ切殺シ血刀ヲ提ナガラ天主ヲ下リ
何トシタルゾ飯田トアレバ津川玄番允進出テ某ヲ
モ御成敗カト申セバイヤ々々其方ナドニ構ハナシ
トテ通り過キ振返テ切倒シ給フ津川討手ノ半兵衛
ハ時刻ヲ延シケレバ面目ヲ失フ淺井田宮丸ハ若輩

者ナレハ何ノ無造作禮ノ間ニテ森久左工門尉討果
ケリ信雄三臣ヲ害シ濱松へ使札ヲ以テ急キ清洲へ
御来儀被成万ツ御指引頼入候予モ長嶋ヨリ出合可
申然レバ岡田長門守星崎ノ居城并大野鎮鍋ノ領地
三列ヨリ手寄ニ候へバ岡崎蒨屋衆早速押寄請取ラ
ルベキ由申入候津川淺井ガ城へハ此方ヨリ勢ヲ指
向ノ昔被申遣ケレバ源君相心得給フノ由御返事有
テ石川伯耆守水野惣兵衛大将トシテ星崎ノ城可攻
從大野鎮鍋ノ地ヲバ戸田三郎右工門清水權之助兩
人行テ可請取ノ昔被仰越信雄ヲ見次ントテ兼々甲
斐信濃駿河遠江三河五ヶ國ノ人數ヲ被催ケルガ小

田原ノ北條氏政御縁者ニテアリケレ共関八列ヲ領
シ折ヲ得バ源君ヲモ亡ン覺悟ナレバ留主ノ國へ乱
入セン事ヲ氣遣給ニ小田原へ朝比奈弥太郎ヲ御使
ニ被遣信雄ニ頼レ不寄何時出馬スルノ間加勢頼入
ノ昔被仰ケリ氏政返事ニ加勢ノ儀安キ御事ニテ候
へ共常列ノ佐竹義重近日當表へ相働ノ由兼リ候間
可有御免昔被申ケレバ源君奇怪ニ思召シ重テ弥太
郎ヲ以テ上方へノ聞ニ候奈無人ニテモ不苦候間兄
弟衆ノ内一人被指越可被下ノ由被仰入是ハ人質ニ
被召連跡ノ疑ヲ散シ上方ノ者ニハ北條家ヨリ加勢
アルト深ミサセン為メノ御内意ナリ弥太郎兄ノ右

兵衛尉小田原ニ罷有レハ彼ヲ便リトシ種々懇望シ
ケレ共氏政終ニ合点ナク右ノ通りニ又返事セラレ
ケレバ源君聞召シ扱ハ我ガ留主ヲ窺ト見ヘタリ其
儀ナラバ押ノ勢ヲ可指置トテ駿列沼津ニ松平周防
守江尻ニ阿部弥一郎黒田半右工門多々内又一郎板
倉四郎右工門高國寺ニ松平玄蕃允長窪ニ牧野右馬
允甲府ニ平岩七ノ助郡内ニ鳥居彦右工門尉信列伊
奈ニ菅沼小大膳是ニ付ク衆知具遠山大草下奈羽部
平居波合駒場等ナリ松尾ニ小笠原掃部助飯田ニ保
科禪正深志ニ小笠原右近太夫諏訪ニ諏訪安藝守佐
久部ニ柴田七九郎上田ニ眞田安房守小室ニ芦田源

十郎遠列懸川ニ石川日向守久野ニ久野三郎左工門
濱松ノ御留主居大久保七郎右工門高力与左工門其
外少身ノ侍數多被残置ケルバ五ヶ國ノ人數四方余
ト雖モ御供ニ被召連勢僅一万七千ナリ秀吉ハ世余州
ノ主ナレバ留主居押ノ勢ヲ引キ内バヲ取り十万余
アルヘシ彼大軍ニ小勢ヲ以テ向ヒ給フ御手立跡ノ
北條押ノ儀彼是被仰付丹羽氏次ヲ召シ急キ尾列岩
崎ノ居城ニ至テ普請等仕リ尾三兩國ノ通路ヲ可守
信雄ノ前ヲバ能々心得候ハントテ被遣同十三日濱
松ヲ進發三列吉田ノ城へ御入り酒井忠次ヲ先立テ
翌日岡崎へ御着陣有テ本多重次ヲ召シ三列ノ御仕

置被仰付岡崎ニ殘シ給ヒ明ル十五日尾州清州へ着
城アル信雄早速御出陣過分不淺ノ由御禮被仰ケ
リ秀吉ハ信雄ヲ討ントノ謀滝川ガ返忠ニ依テ露頭
シ岡田津川淺井等ヲ誅戮セラレ手持惡ケレバ急キ
尾州へ令發向三士ノ教養ニ報セントテ嶋津義久毛
利輝元折ヲ得バ國境ヲ奪取シ模様ナレバ彼ガ押ノ
為ノ備作二州ノ太守宇喜田秀家ヲ殘シ又越中ノ佐
々成政信雄方ノ由風聞有ルニヨリ能登ノ國守前田
利家ニ押サセ池田勝入父子森長可稻葉一鉄子息右
京亮郡上ノ兩遠藤何モ濃州ニ住シ畝地へ程近ケレ
ハ早々手出セラレ候へ追付出張スベシト先使札ヲ被

越ケル子細ハ勝入ハ信長ノ乳母ノ子森ハ勝入ガ婚
稻葉遠藤ハ信長重恩ノ者ナレバ若シ信雄へ内通モ
ヤアラント疑ヒ畝味方ノ色ヲ立サセ其上義濃地ニ
懸リ可相勵興意ニテ如此云遣シ其内ニ大和山城河
内和泉攝津近江義濃伊賀若狹越前丹波丹後但馬因
幡伯耆幡磨淡路以上十七ヶ國ノ人數ヲ被催ケリ勝
入秀吉方ヨリノ書簡ヲ見テ子息紀伊守之助ヲ近付
云ケルハ信雄ノ家老中川勘右エ門尉有之尾州犬山
ノ城其方如存二三年前迄ハ予預リ居住シ今大垣
へ所替シテアリト虽下々共ニ案内ハ能知ツ地ノ者
ハ古ヲ思ヒ慕へシ中川ハ勢州峯ノ城番手ニ罷有ル

茶何ノ造作ナク可_レ乗取間早速打立ント評談シケレ
バ信長ノ厚恩ヲ蒙リ給ヒ如何アラント辞シケレ共
弟古新_ニ秀吉へ人質ニ遣置ケルガ可_レ捨_レ歎兄弟ナレ
バ思入違タリト申ニヨリ不及力同シ三月十三日鶴
沼へ出勢シ夜陰ニ及テ木曾川ヲ舟ニテ渡シ犬山ノ
城ヲ乗取リ大坂へ注進シ城内へ兵糧ヲ竈サセ諸方
ノ味方ヲ相待ケル森長可ハ池田父子犬山入城ヲ聞
キ同十五日三千余騎ニテ金山ヲ打立犬山五郎丸へ
押出シ勝入ト牒合セ翌日午ノ刻小牧表へ出張シ爰
彼放火シテ勝入ハ犬山森ハ羽黒ニ陣ヲ取ル源君此
由ヲ聞召酒井忠次ヲ召シ急キ犬山近邊打廻リニ出

テ國中ノ様躰ヲ見考へ可_レ然地ニ陣取り一左右可_レ仕
昔被_レ仰付ケレバ則打立ケリ相從フ人々ニハ長澤上
野从本多豊後守父子松平主殿助同内膳正奥平九八
郎形原紀伊守西郷彈正本多彦八郎松平因幡守都合
其勢五千余騎信雄ヨリノ案内者天野周防守雄_{カク}光ヲ
先立小牧山へ打出テ敵陣ヲ見スマシ陣ヲ取り同十
七日ノ未明ニ羽黒表へ出勢シ己ノ刻計ニ凱_{トキ}ヲ嚙_ト
作り突テ懸ル森長可川ヲ越サセシト防戦シケレ共
忠次乗回シ下知スルニ依テ終ニ被_レ切立金山指テ敗
軍ニ味方競懸テ惡_シ蓬_{キダテ}シ返セ戾セト呼ハリケレ共
跡ヲモ不見北ル間今井前原追討ニ野呂次右工門

同息孫十郎井戸次兵衛玉木彦太郎等ヲ始トシテ二
百余討取り小牧へ引入リ清洲へ注進申上ケレバ源
君モ信雄モ門出ヨシト悦ヒ清洲ノ城本丸ニ内藤三
左衛門尉二ノ曲輪ニ三宅惣右工門中安彦次郎大澤
兵部ヲ被入置翌十八日兩将一万三千余騎ヲ引率シ
小牧山ニ至テ古城ヲ拵へ御座ケル石川數正水野忠
重ハ去ル九日岡田長門守ガ居城星崎へ押寄城請取
ン由使者ヲ立レバ留主ニアリシ岡田庄五郎岡田長門
守弟也
山口半左工門守岡田長門
守妹婿也長田弥左工門其外ノ者共渡
ス事思モ不寄ト申ニ付其俣取懸散々ニ攻ケル城ヨ
リモ弓鉄炮ヲ放チ一先ハ防ケレ共後詰ノ便リモナ

ク外郭ヲ破レ次第々々ニ弱リケレバ信雄ヨリ加勢
ニ指越シ給フ織田越中守ヲ頼ミ降参ヲ乞ヒ同十七
日城ヲ渡シ岡田ハ上方へ立退ク山口長田ハ親キ者
共清洲ニアレバ自今以後信雄ニ奉從ヨリ外ノ事ア
ラントテ其俣國ニ留ル石川水野ハ星崎ノ城ニ鈴木
兵庫助父子ヲ入置小牧山ニ至テ源君ニ見ユレバ早
速星崎ノ城攻取タル由御褒義被成ケル戸田三郎右
衛門清水權ノ助兩人モ岡田ガ郎等天野五右工門楯
籠ル鎮鍋ノ要害へ向ヒ少々セリ合フ内ニ星崎ノ城
落去シケル由告来リケレバ其明ル日天野モ降人ト
成テ退散シケリ兩人城ヲ請取り源君へ注進仕レバ

諸方ノ手筈首尾シケルト仰有テ事外ノ御機嫌ナリ
然ル處ニ丹羽氏次御目見ニ參シ岩崎居城塀ノ手ヲ
合セ家人等竈置ノ由言上シケレバ源君御祝着有テ
信雄ノ勳氣ヲ請免シ直ニ岩崎ニ歸リ三州へノ通路
可守護ノ旨仰ケル氏次榊原康政ヲ頼ミ當地案内者
タルノ間御手先ニ被置似合敷御用等ニ御座者被仰
付可被下候岩崎ニハ第次郎三郎氏重ヲ指置申ノ間
可易尊意ノ由訴訟仕ルニ付任其意氏重ヲ岩崎ノ城
ニ置キ給ヒ勳人ヲハ榊原ガ組ニ定メ國中ノ様躰具
ニ御尋被成扱三州往還ノ押ニ小幡ノ古城ヲ取立本
多豊後守父子并甲州穴山ガ被官共ヲ入置犬山ノ城

ヲ乘返ント心懸給フ

東照記卷第十七終

東照記卷第十八目錄

秀吉尾刈出勢事付長久手合戰事

滝川蟹江城忍入事付降参事

源君信雄勢刈御出馬事

秀吉再尾刈癸向事

秀吉與信雄源君和平事

佐々成政濱松來事並御義丸大坂御上事

源君秀吉御云入被遣事並御屋作事

秀吉根來寺放火事並御妹源君御輿入事

水野石川為御使大坂上事

真田敵對事付押寄上田城事

本多正信忠言事付石川數正上方立退事

源君被叙參議事

信州侍意變屬カ白殿旗下事

駿府御住處取立事ニ並平居波合下條御成敗事

陽光院薨逝事

源君御上洛事並駿府御移徒事

御即位事

東照記卷第十八

秀吉尾州出勢事付長久手合戰事

三月廿一日秀吉池田勝入尾州犬山ノ城衆取タル由
ヲ聞テ大坂ヲ打立同廿四日濃州大垣ノ城ニ入り爰
ニテ勢揃シ十萬余ノ人數ヲ七段ニ分テ鴉沼ノ渡リ
ニ舟橋ヲ懸ケ段々ニ押入セ廿七日犬山ニ至テ手遣
アレバ池田父子森長可稻葉一鉄郡上ノ兩遠藤岩崎
青塚へ出張ス二重堀ニハ日根野備中守弟弥次右衛
門須江クラガ賀田中ニハ堀久太郎長岡越中守長谷川藤
五郎蒲生忠三郎如藤作内神子田半左工門小口ニハ
筒井四郎伊藤掃部助外久保ニハ丹羽長秀小松寺ニ

ハ三好秀次内久保ニハ金森五郎八幡屋出羽守一色
村ニハ御次丸ノ勢陣取ケル秀吉ハ樂田ノ東ニ陣城
ヲ取立堀塙柵ヲ付天主ヲ上犬山ヲ根城トシテ小牧
山ノ三方ヲ取卷キ西ハ日保曼陀羅寺東ハ二重堀須
江垂賀小松寺北ハ青塚樂田雲霞ノ如ク打圍ニ二重
堀ヨリ外久保迄馬防ノ土手ヲ築鉄炮ヲカケ居タリ
源君是ヲ御覽シテ敵ハ大軍ナリ出戦叶間敷ト宣テ
小牧山ノ西南ニ勢ヲ隱置キ折ヲ得可相働由御下知
有テ着倒付サセ御覽有ルニ人數僅ニ一万五千ナリ
信雄ノ勢多シト虫勢刈松ヶ嶋峯龜山加陽菜名長嶋
濃州竹鼻高津駒野尾州蟹江黒田其外所々城々ノ押

ニ被指置残テノ人數三千合テ一萬八千ナリ此小勢
ヲ以テ十万余ノ大軍ニ向ヒ給フ御心ノ中コソ無
敵ナレ然ル所ニ青塚ヨリ小牧山ノ西方へ足輕ヲ出
シ味方ノ勢ヲ引出ント計ケル松平康重手先ナレバ
是ヲ追拂ント馬上十二三騎步行足輕廿余人指添越
ケル小野麻ノ助生年十七歳ニテ右ノ馬上ニ交リ行
バ敵ソロク々々アヒシラヒ引付ル處ヲ各乗懸追散シ
輕々ト引取ル麻ノ助ハ一同セス北ル者ヲ追懸敵陣
近キ處ニテ步行足輕一人突倒シ引返セハ敵味方共
ニアツハレ能振合ナリト羨メケリ叔又池田勝入ハ
羽黒合戦ノ刻犬山ノ城ニ在リナガラ婚ノ森長可敗

走ヲ不救酒井忠次ヲ遁シタル由世人悪口シケル事
ヲ無念ニ思ヒ小牧山ノ敵ヲ切崩ント志シケレ共源
君信雄堅陣ヲ張テ御座ケレバ有繫ノ秀吉サヘ源君
ノ軍行ニ恐レ不遂ニ一戰ニ重堀ヨリ青塚ニ至テ馬防
ノ埒ヲ結ヒ用心緊キ躰ナリ増テ勝入無人ヲ以テ軍
ヲ可破手立ナケレバ此上ハ西三河へ出張シ岡崎ノ
城ヲ兼取り羽黒ノ耻ヲ雪ベシトテ竊ニ樂田ノ陣城
へ參シ右ノ趣キ申入ケリ秀吉聞テ實允ノ計策ゾカ
シ岡崎ノ城ヲ取タラバ小牧山ノ敵不戰シテ忽退散
スベシ然ラバ三好秀次ヲ大将トシ森武藏守ヲ伴打
立候へトアリケレバ勝入大ニ悦ヒ立歸ントシケル

ガ孫セモ武藏守モ婿ナレバ一族計打出面々ノ働ヲ
申ンモ私ナルベシ其上人ノ疑可有思惟ヲ回シ無人
ニテ候へバ誰ソ一人御目付ガテラ被指漆可被下由
望ケルニ付堀久太郎ヲ加フル孫セハ秀吉ノ甥ニテ
養子ナレバ馬回ノ勢少々付遣シ敵ノ不知様ニ忍出
ヨト被申ケレバ奉相心得トテ四月七日ノ夜半ニ紛
レ篠木柏井へ段々ニ押出ス一番池田父子六千二番
森長可三千三番堀秀政四千四番三好秀次一万二千
都合二万五千兩郷尺地モ不殘陣取ケル竜泉寺大日
ノ渡リニ付置給フ伊賀ノ忍ノ者立歸リ此由角ト膝
部正成ニ申聞ケ源君ノ御身ニ立レバ水野忠重榊原

康政松平康高植村正勝岡部正綱丹羽氏次等ヲ召シ
敵既ニ篠木柏井へ出張スルノ由告来ノ間早々小幡
ノ城へ参シ本多豊後守ト申合セ敵押寄ルナラバア
ヒシテヒ援兵ヲ待ベシ又西三河へ働クナラバ小幡
ノ城ニハ甲州穴山ガ被官保坂常陸其外ノ者共ヲ指
置敵ノ形勢ニ依テ押懸討ベシ上方者ナリトテ見侮
マバラ懸ケスナ軍法ハ兼テ定ル如條具相守リ候へ
然レバ三宅弥次兵衛丹羽ガ手ニ付ケテ越ナリ勤从
ハ当地案内者タルノ間真先ニ押サスルノ条卒尔ノ
働スベカラズ何モ一途ニ進退可仕由被仰渡ケレバ
各一同シテ同日申刻旗指物ヲシボリ小幡ヲ忍出

テ日暮テ小幡へ着陣シ本多廣孝ト示合セ遠聞ノ者
ヲ竜泉寺表へ出置キケルカ敵早三河路ヲ指シ打立
ノ由告来レバ則小幡へ注進仕リ敵ノ半途ヲ討ント
用意シケリ秀次加様ノ拵アリトハ夢ニモ不知池田
父子森堀ヲ先陣トシテ亥ノ刻計ニ篠木柏井ヲ立テ
大日ノ渡リヲ越へ竜泉寺ヲ右ニ見テ小幡野ノ東細
山崎へ押出シ陣取リケリ先手三組ハ熊針ノ西通り
へ出張シ夜明ルト等々岩崎狭間ヲ藤嶋へ押行ント
スル處ヲ丹羽次郎三郎氏重岩崎ノ留主居ニアリケ
ルガ足輕ヲ出シ嚟留ケル池田父子森長可先ヲ懸ケ
堀秀政跡手トシテ押寄一時ニ攻破リ氏重並家来ノ丹

羽内藏助同傳七郎同金右工門同善七郎同弥太夫同
助六須賀四郎右工門林市藏岩室理右工門森傳三郎
今井七右工門加藤藤左工門柴田喜八郎鈴木五郎右
工門ナトヲ始トシテ侍ハ不及申出家町人返撫切ニ
シ首三百余城ノ東鼻立山ニ於テ實檢ス三好秀次ハ
細山崎ニテ九日ノ早朝ニ兵糧ヲ遣ヒ先ノ様跡ノ跡
ヲ見合有之處ニ小幡ヨリ榊原康政是ニ付々衆岡部
丹羽合テ二千氏次案内者トシテ先ヲ懸ル松平康高
千三百本多廣孝六百植村正勝三百五十水野忠重八
百都合五千余段々ニ押出シ辰ノ刻計ニ時ヲ作テ突
テ懸ル秀次ノ先陣田中久兵衛不及一戰敗軍ス此手

ニ与セシ村善右工門岡本彦三郎白江權太夫ナド踏
留ノテ鉄炮ヲ放テ防ケル丹羽氏次三宅友貞^{サダ}追拂ン
トテ懸リ氏次ハ馬ヲ打倒サレ落ケル友貞ハ其終押
破リ崩シギワニテ一人突伏セ首ヲ取ル其外ノ者共
推付々々切倒ス氏次步行立テ即從七八人引具シ御
檢使ヲ討セジト懸付レバ三宅氏次ニ向ヒ大事ノ御
目代ニ来リ如此働キ無向目由申セバ只今ノ様子不
及是非ト賞羨シ共ニ進テ秀次ノ旗本指テ追懸ル渡
瀬小四郎木下勘解由同周防守ナドヲ始メ究竟ノ兵
七八十鎧袞ヲ作テ多ハ金ノ捧指タル武者待君タル
ニヨリ各追留リ脱合フ所へ榊原康政小性馬廻百計

引連大ノ眼ヲ瞋イカサカシ懸破レ者共ト高聲ニ呼バ、ツ
テ進ノバ大須賀康高負ジ劣シト左手へ押回ス右手
へハ水野忠重本多植村ト共ニ懸リ左右前後ヲ争フ
ニヨリ敵突テ懸リ不得一度ニバツト筭バケタリ則
追討ニスル處ニ忠重嫡子水野藤十郎勝成知名松早首
ヲ取テ提ケリ其外ノ者共突伏セ切倒シ高名ス二人
ノ木下岡本并金捧ノ武者ニ三十人返合討死ス残ル
者共散々ニ崩レケリ五組ノ味方先ニ敵ノアルヲバ
不知北ルガ面白サニ岩崎狭間近ク追懸ケル堀秀政
池田森ガ跡手ナレバ岩崎ヨリ良ワシトラノ山崎ニ備テアリ
ケルガ是ヲ見テ其終突テ懸リ又御方ヲ一里余リ追

討ニシケリ五組ノ者共數度取テ返シ防ケレ共敵ハ
堯万三千シカモ荒手ニテ堀ヲ先トシ森池田跡ヲ詰
ケリ御方ハ僅五千一軍シテ追乱ス上ナレバ守リ返
ス事不叶三百余リ討レ敗走ス源君ハ小幡ヨリノ注
進ヲ聞キ給ヒ小牧山ノ御留主居酒井忠次石川數正
兩家老ヲ大将トシテ御譜代大名并信雄ノ勢三千ヲ
被殘置八日丑ノ刻ニ小牧ヲ恐テ御出馬アリ信雄モ
三千騎計ニテ同ク出テ給フ勝川ニテ夜明ケレバ川
ノ名ヲ問セ玉フニ勝川ト答フ名全ク吉ト悦ヒ洗革
ノ黒糸ヲドシノ鎧ヲ着シイボ鉢ニ金シダノ前立打
タル御甲ヲ召シ黒鞆ノ太刀ヲハキ白キ麾ヲ御腰ニ

指セラレ地白大形ノ木綿ニ臙脂縮ノ襟ヲ懸タル赤
裏羽織ヲ着シ黒鹿毛ノ御馬ニ召シ乗出セ給ヘバ井
伊直政御旗本ノ先手ニテ眞先ヲ懸ケリ渡邊守綱大
久保忠佐其外七八人ノ足輕頭廿人組ノ鉄炮ノ者ヲ
引具シ井伊ニ續テ押ケリ其次御馬回衆信雄三十騎
ニテ御跡ヲ黒メ給フ寛照重渡邊政綱七本ノ白旗金
扇子ノ御馬印ヲ進退シケリ内藤正成高木清秀御馬
ノ左右ヲ乘リ御諛ノ旨ヲ承テ各ヘ觸聞ス仰出ハナ
ケレ共武者奉行ト云ツベシ井伊ガ人數千八百御旗
本四千五百合六千余ノ勢ヲ引率シ小幡ノ味方ト牒
シ合セ敵ノ前後ヲ遮リ討ント謀テ猪腰原へ押出シ

給フ處ニ五組ノ者共敵ノ跡ヲ追行ノ由先ニ指越シ
給フ御使丹羽六太夫鶴殿善六又守山邊ノ郷人共告
来リシカバ直ニ長久手へ急セラレケリ然ル處ニ向
フヨリ見ナレザル小旗指タル者多ク懸出レバ廿人
組ノ足輕頭不審シ先ノ様子ヲ見定シ為メ我モ々々
ト乗出ス處ニ堀秀政先懸ノ勢マバラニ成テ北ル御
方ヲ追来ル加藤喜助早懸合一人突伏セ首ヲ取ル其
外ノ衆敵ヲ追散シ長久手ノ東ノ山ヲ指テ懸ケリ堀
ガ者共塗笠著タル貳百人ノ足輕并井伊ガ赤備ヲ見
テ不叶トヤ思ケン山陰へ引返セバ秀政懸付下知ヲ
スル森モ池田モ雨池ノ上ナル山へ押上間一町余リ

隔森ハ南池田北堀ハ池田ニ續テクレ田ヲ前ニアテ
猪腰原ヘ向ヒ互ニ備ヲ立ントヒシメキケリ源君ノ
足輕頭長久手ノ向山ヨリ尾ヅル崎ヘ同心ヲ引回シ
鉄炮ヲ放サセケル井伊ハ富士山ヘ押上旗ヲ立レハ
諸勢ハ大敵ヲ見テ南北ノ山平谷際ニ居テ不進得源
君ハ本道ヨリ懸ント被成ケルガ寛渡邊北ル味方
ニ押立ラレ給ヒテハ如何ナリト云テ横折違ニ長久
手ノ上ナル山ヘ御旗ヲ押上レバ則御馬ヲ寄セ内藤
高木ヲ物見ニ出給フ渡邊守綱先ヲ見切り御旗本ヘ
ト急ケルニ兩人行合ヒ先ハ如何ニト問ヘバ五組ノ
衆悉ク敗軍シ敵追スガツテ来リケルガ此方ヨリ押

出タル勢ヲ見テ山手ヘ引上ル間御方追懸向山ヲ取
テ鉄炮ヲ打セケル井伊ハ長久手ノ良ノ山ニ旗ヲ立
アリケレ共諸勢進子バ續ク足輕廿四五人山ノ尾崎
田縁ヘ出シ是モ鉄炮ヲ放セ有之其外ノ者共ハ遠慮
シテ山平谷間ニ伏テ居ケルナリ去レ共敵モ備ヲ立
兼左右前後ヲ走リ回テ下知シマバラナル躰ナリ只
今御旗本ヲ以テ御一戰遊シ給ハバ若シ御勝利ヲ得
ラルベキカ敵備ヲ立堅メタラバ御大事タルヘキト
見及候奈此旨可申上為メ急クナリト答ヘケレバ兩
人聞テ是ヨリ御旗本ヘハ程遠シ見分ノ通り具ニ言
上スベシ先大事ナレバ早々被參ヨト申ニ付守綱心

得タルトテ取テモドシ山ノ後へ至レバ世人組ノ足
輕五六十人引へ居タルヲ召連山ノ尾崎へ行見レバ
井伊ガ足輕共最前打合處ニハ不居山ノ峠へ北上リ
ノゾキ打ニ放ス間臆シタルカヲリサガツテ打候へ
ト下知シ本ノ田縁へ押回シ横折違ニ鉄炮ヲ打セケ
レバ越ス鉄炮ハ山ノ敵ニアタリ下ル鉄炮ハ下ニア
ル者ニ中ルニヨリ敵引足ニ見ケル森長可アノカサ
ナル山ノ敵ヲ追拂タラバヲヅル崎ノ者共ハ不戦シ
テ敗走スベシ急キ懸レ者共ト麾ヲ取テ下知シケレ
共世人組ノ足輕歴々ノ二番目三番目ノ子共ナルニ
ヨリ頭ヲモ欺ク計ニ云テ込替々々兩ノ足ノ如ク鉄

炮ヲ放ケル程ニ不進得長可腹立シ走り出テ追拂ン
トセシヲ打倒シケル間其手ノ同勢色ヲキ立テゾ見
へシ源君守綱が見分ヲ聞キ給ニ御旗ヲ飛セ急キ給
フ池田勝入是ヲバ不知森ガ手へ先鋒ノ者ヲ入替ン
ト下知シケル處ニ金扇子ノ馬印嶺間ヨリ見レバ扱
ハ家康懸付ラレタルト驚キ味クヨリ早ク裏崩ス平
松金次郎是ヲ見テ茶袋ノ先ニ豹ノ尾長クサゲタル
指物ヲ指シ白キ丸ノ付タル赤根ノ羽織ヲ着シ手鎧
ヲツ取り走り出レハ森ガ黒母衣武者五六騎懸向フ
鳥居金次郎本多八藏今村次郎四郎長田傳八郎蜂屋
七兵衛安藤彦四郎其外七八人進ケレバ平松早鐘ヲ

打入ル、敵崩足ノ事ナレバタマラズ敗走ス次テ鳥
居金次郎鐘ヲ以テ山田ハ右エ門ト名乗返合セ鐘ヲ
突出ス處ヲタ、キ立ケレバ山田不叶貝吹テ北ケリ
池ノ南山ノナダレニ森長可倒伏メアレバ本多ハ藏
二刀切り森ト不知鼻ヲソギ分捕シケリ其下方ニ森
ガ黒母衣武者手負居タルヲ今村次郎四郎スハダニ
テ懸合セ討取ル其ヨリ左手ノ山ニ池田勝入手負テ有
ケルヲ長田傳八直勝走り寄テ突倒シ首ヲ取ントス
ル處ヲ蜂屋七兵衛懸合セ勝入ヲ切レバ餘ル太刀ニ
テ長田ガ指ヲ打落ス其外ニ三人池田ガ死體ヲ目
懸寄ケルヲ直勝ハ幡味方討ヲスルカトテ太刀取り

直シ向フ安藤彦四郎直次通り合セ是ヲ見テ若輩ノ
者ノ取ル首ヲバ奪ス間敷ト云ヘバ蜂屋味方打トイ
ハレ無面目ヤ思ヒケン言葉ノ下ヨリ山下へ懸テリ
高名ス残ルニ三人ノ者共安藤ニ怒ラレ北ル敵ヲ追
懸計取りケリ直次長田ト男色ノ昵アレバセハシキ
所ニテアレ共言葉ヲ懸勝入ヲ討セ先へ懸行一人突
伏セ首ヲ取ル池田紀伊守手負テ退ケルガ父勝入討
死ト聞ヨリ取テ返シ戦死ス誰ガ討タルヤラン大将
トシラザレバ鼻ヲソヒテ通りケリ源君ハカサナル
山ヨリ押ヲロシ給フ處ニ向フノヲツル崎ヨリ勝入
カ先手池田丹後守ト云シ者金ノ團扇ヲ持チ同勢ヲ

招キ待懸ケレバ大岡傳藏鉄炮ヲ放ツ同弟久藏弓ヲ
射ル内藤四郎左エ門高木主水本多弥八郎鶴殿善六
神原隼之助加々丸甚十郎丹羽六太夫多門縫殿助小
栗忠藏ナトヲ始トシテ四十餘騎御馬ノ前ニ有リ渡
邊守綱白キ手桶ノ文付タル緋地折懸ノ指物ヲ指シ
廿人組ノ足輕十二三人引具シ横折違ニ懸来テ鉄炮
ヲ打セ例ノ大身ノ朱鑓ヲ以テ走り出テ追拂ントシ
ケレ共此丹後守少モ不立去三十計ノ味方ヲ引付甲
ノ鍛ヲ傾ケアレバ有繫名ヲ得シ鑓半藏モ突崩ベキ
様ナシ又引事モナラザレバ續ク同勢皆敗走セシガ
敵不知ヤ一人モ道間敷トヨバワツテ鑓ヲ振回ケレ

バ其時敵左右ヲ見渡シケルニ惣敗軍ニ及間無カ一
度ニ墮ト崩レケリ守綱追懸七人突伏セ足輕共ニ首
ヲ取セ鑓先ヲ損シ家人ニ持セ置キ刀ヲ抜テ一人切
倒ス家人其鑓ヲ以テ向敵ヲ突ケバ不通シテ却テ鑓
ヲ奪取レ守綱ニ怒ラレン事ヲ悲ミ武藏孫ノ美ヲ見
付半藏ガ鑓ヲ敵取テ北ル間取り返シ給リ候ヘサナ
キニ於テハ男ヲサセ間敷ト言葉ヲ懸レバ武藏不及
是非弓ヲ以テ追懸終ニ彼ノ敵ヲ射倒シ鑓ヲ取テ彼
者ニ渡シケルヲ守綱聞テ感羨シケリ大岡兄弟渡邊
ニツビヒテ早ク懸入リ二人ナガラ高名ス源君其ヨ
リ追討ニ被成ケレバ甲州衆谷底山平ニ遠慮シテア

リケルカ御合戦御勝ト見テ我モ々々ト山クレ田ヲ
乗越へ追首ヲ取ル井伊直政ハ源君ト前後ヲ争ヒ左
手ヨリ懸テ黒母衣武者ヲ組打ニシテ是ヨリ先ノ高名
アラジト廣言ヲ吐ク高木善次郎渡邊六左工門父子
久永源六成瀬小吉長見新三郎ナド早ク懸合セ振能
ク高名ヲシケリ寛照重渡邊政綱御馬ノ左右ニ至テ
味方悉ク追乱候間何方ニナリトモ御旗ヲ立テレ御
人数ヲ御マトヒ可然候ハシ由申上レバ猪腰原ヲ一
文字ニ押通シ小幡へ旗ヲ入ヨト仰ケリ内藤正成高
木清秀本多正信義ヲ御尤ニ御座候小幡ノ城ニハ甲
別先方ノ穴山ガ者共被殘置ケル間アレニテ御人数

ヲ被待合宜カラント言上スレバ弥其通りニ被仰付
小幡ノ城へト急セ給フ渡邊守綱大久保忠佐走り回
テ向ノ川ヲ追留ニセヨ長追スベカラズ御旗ヲ見テ
懸付候へト下知スル處ニ関金平向敵切倒シ守綱ニ
断ル兩人ハ矢田川ヲ追留ノト觸回シ御旗ニ付テ懸
レバ流石物馴タル兵共ナレバ北ル敵ヲ追捨テ我先
々々ト小幡ノ城へ馳着ク源君是ヲ御覧シテ荒手ノ
穴山衆ヲ先へ張出サセ苦戦シタル者共ヲバ二ノ手
ト定メ息ヲ續セ給フ信雄モ十四五騎ニテ小幡へ入
城シ源君ニ御對面有テ今日ノ御合戦ノ躰免角可申
様無御座ト感悦セラレケリ扱又秀吉ハ三好孫七細

山崎ヨリ敗北ノ由ヲ聞キ無心許間早速打立家康ノ
歸路ヲ遶ントテ二重堀岩崎青塚所々ノ番手樂田ノ
留主居等嚴密ニ云付同日未ノ刻三万余騎ヲ引率シ
竜泉寺指テ急レケリ酒井忠次此躰ヲ見テ秀吉打立
タルコソ幸ナレ早々勢ヲ出シ二重堀ヲ踏破リ山崎
外久保アタリヲ放火シテ樂田ノ陣城ヲ取テ可令驚
敗ト同將ノ石川數正方へ使者ヲ立レバ大事ノ御留
主居被仰付候処ニ卒尔ノ働ヲシテ大軍ニ被推立却
テ小牧山ヲ取レナバ骸ノ上ノ耻辱ト云殿ノ思召シ
如何セン只延引可有ト返事シケレバ忠次再三使ヲ
立テ敵大軍ナリト虽弱兵ゾカシ上方ニテ森ナドヲ

バ鬼武藏ト云ゲニ候へ共羽黒合戦ノ時手並ヲ見ツ
ルガ三河ノ餓鬼ニハ劣リタリ急キ西三河衆ヲ伴ヒ
被出ヨ東三河ノ者共ト揉合セ二重堀ノ敵ヲ追拂シ
ト申ケレ共數正何ト思ケルカ右ノ通りニ返事仕リ
合点ナケレバ忠次事外ニ腹立シナガラ青塚ノ小屋
少々焼キ深入不叶引返ス本多平八石川長門守兩人
ハ源君御跡備ニ被仰付小牧ヲ少遲ク出テ長久手ノ
合戦ニ不逢能敵ガナト志ス所ニ秀吉懸玉ヲ見テ
忠勝先立テ七百余騎ヲ引具シ春日井原ヲ一文字ニ
押行敵陣近キ所ニテバ折々鉄炮ヲ放懸ケリ秀吉是
ヲ見テアノ胴黒ノ小旗ハ何者ゾト問ハレケレバ家

康ノ郎等本多平八郎ナリト答フ誠ニ聞ル勇士ゾカ
シ我此大軍ヲ進退シ行ニ少モ臆シタル無^ク躰懸通ル
有様見事ナリ押寄踏殺ン事何ヨリ以テ安キ儀ナレ
共細山崎長久手兩戰事終リ敵未^レ人數ヲマトハサル
ノ由道スガラノ落人共告聞スレバ小事ニ懸テ大利
ヲ失フ事軍慮ノ不覺ゾカシ何モ不^レ構一足宛モ先へ
急ケト云テ懸ラレ無^レ程竜泉寺山へ押上坂ヲ下リニ
小幡野ヲ見ラレケレバ源君信雄早入城シテ御座ス
ニヨリ馬ヲ留メテ考ラル然ル處ニ井伊直政小幡ノ
城ニアリケレバ其手ノ後^レ者五六十騎赤鎧ニテ馳
着ク又本多石川横折^{スレカヒ}違ニ押入レバ秀吉見分シ敵城

ヲ堅メ其上日西山ニ傾バ卒介ノ働キ叶間敷トテ竜
泉寺へ押戻シ夜中ニ樂田へ歸城セラレケリ源君モ
小幡ノ城ニ穴山ガ者共ヲ指置キ信雄打連成ノ下刻
小幡ヲ恐テ御立平村へ懸リ小牧山へ入セ給フ秀吉
夜明テ樂田ヨリ三万余ノ勢ヲ引具シ岩崎山へ打出
ラル、所ニ源君早小牧山ヲ七本ノ白旗金扇子ノ馬
驗ニテ飾リ御留守居ノ衆ヲ二重堀青塚表へ張出サ
セ軍ヲ持御座ケレバ秀吉横手ヲ打テ驚キ感ジアレ
コソ生摩利支天ヨト云テ樂田ノ陣城へ引入ル、敵
味方共ニ秀吉竜泉寺へ懸付徳川殿ノ旗先ヲ見ナガ
ラ池田森ガ吊ヒ合戰ヲ不^レ仕給戰場ヲハヅシ樂田へ

北来リ秀次敗北ノ上塗ヲ仕給フト悪口シケレバ秀
吉無念ニ思ヒ小牧山ノ敵ヲ挑出シ一軍シテ小幡ノ
耻ヲ雪ントテ拾万余ノ勢ヲ三ツニ分ケ青塚岩崎二
重堀へ張出サセ其身ハ三万余リノ兵ヲ引連レ小松
寺へ本陣ヲ移シ敵軍ヲ破ント謀リ給フ源君此躰ヲ
御覧有テ青塚表ノ押トシテ小牧山ノ西方ニ水野惣
兵衛神原小平太佐久間駿河守三頭合テ二千八百余
被指置残テ一万五千ヲ十六手ニ分ケ酒井左エ門尉
石川伯耆守ヲ先手トシテ二重堀ノ前ヲクリ出シ東
ノ野ニ陣取セ給フ二重堀ニ八日根野備中守弟弥次
右エ門加藤作内長岡越中守蒲生忠三郎堀久太郎長

谷川藤五郎大将トシテ貳方計ニテ堅メケルガ是ヲ
見テ小牧ヨリ打拂テ勢ヲ出シ合戦ヲ持テ候間小松
寺ノ朧勢ヲ詰ラレ玉へト櫛ノ齒ヲ引如ク告来レバ
秀吉聞給ヒ敵馬ヲ入ナバ成ヌベキ程折敷テコタへ
ヨ此方ヨリ懸出スベカラズ敵懸リナバ朧勢ヲ詰ベ
シ左ナクハ出スベカラズト被申ケレバ各膝ヲ振ハ
シ相待ケル又小牧山ヨリ押出シタル十六手ノ衆二
重堀ノ色メクヲ見テ切テ懸ント勇ケルヲ源君制シ
留メ小松寺ノ朧勢ニ重堀へ着ナバ合戦ヲ始ベシ左
ナクハ敵何ト喋グ共勢ヲ出スベカラズト堅ク被仰
付御座ケレバコワ如何ニアレ程色メク敵ヲ切崩サ

テ置事ノ可有之哉御旗本ヲ寄セラレ給ヘト使敷並
ヲ打テ諫ムレ共御免ナケレバ叶ハテ一時計井溝ヲ
前ニ當テ守リ居タリ去レ共小松寺ハ静リ帰テ勢ヲ
可出躰ニ不見日早未^{ニシ}ノ下リニナレバ急キ引取ルト
御下知有テ十六手ノ勢ヲ静々ト小牧山へ打納ラレ
ケリ是ハ小松寺ノ胴勢ヲ二重堀へ寄ナバ一戦ニ可
打果トノ儀ナリ秀吉ハ先鋒ノ兵ヲ餌兵ニシテ討取
セ二ノ目ヲ以テ切り崩スベキノ手立ナレ共源君其
旨ヲ察シ御懸リナケレバ手ヲ失ヒ樂田ノ陣城へ立
帰リ被申ケルハ謀ヲ以テ討ントスレバ重手ヲ越シ
却テ味方ヲ亡ント志サス又推懸戦ント思ヘバ堅陣

ヲ張テ悉ク切取ン模様ナリ何トモ持扱タル敵ナリ
如何様時節ヲ窺ズンバナルマシ長陣ヲ張テ有ナラ
ハ信長厚恩ノ輩敵ノ競ニ付テ裏帰ル事アルヘキト
覺ル間先此度ハ當表ヲクツロケ重テ出勢スヘキト
テ二重堀須江垂賀青塚表ノ勢ヲ引取セ樂田ニ堀尾
茂助山内猪右工門伊藤掃部助等ヲ残シ犬山ノ城ニ
ハ舎弟美濃守秀長ヲ指置四月廿九日大垣へ勢ヲ納
メ其ヨリ濃州大羅ノ寺内戸爲東藏坊カ構へ赴キ玉
フ源君是ヲ御覽有テ秀吉何ノ間ニ大軍ヲ遣得タル
ト大ニ感シ小牧ノ陣城ニ酒井忠次組共ニ被殘置又
小幡ノ古城ニモ本多廣孝父子ヲ指置キ清洲へ御馬

ヲ入給ヘハ信雄モ長嶋へ歸城有テ濃州幕下ノ城々
ヲ氣遣加勢ヲ指越シ玉フ秀吉ハ加々野井弥八郎カ
居城へ信雄ヨリ加勢入シカ共事共セスシテ取懸攻
破リ其勢ヲ以テ不破源六楯籠ル竹鼻ノ城へ押寄堤
ヲ築キ水責ニセラレケル不破人數ヲ出シ追拂ヒ堤
ヲ破ント志シケレトモ秀吉昼夜無油断弓鉄炮ヲ放
サセ取詰玉ヘハ終ニ破ル事不叶降参ヲ請フニヨリ
一命ヲ助ケ城ヲ請取り一柳市介ニ預ケ多藝表へ趣
キ直江村ヲ要害トシテ丸毛三郎兵衛ヲ入置キ濃州
ノ仕置有増云付六月三日大坂へ歸館シ玉フ京童秀
吉ノ源君ニ向ヒ一戰ヲ不遂刺秀次細山崎ニテ敗北
セラレケルヲサシシテ落書ヲ立ケル

孫セハ三好トイヘト又ナシ甥子トイヘト北子
ナリケリ

叔又信雄ハ上方表ヲ氣遣勢州松ヶ嶋へ小坂孫九郎
加陽へ佐久間駿河守ヲ指越城普請被云付ケル源君
ハ小牧清洲ニ於テ長久手一戰諸士ノ甲乙渡邊守綱
大久保忠佐并本多正信内藤正成高木清秀ヲ指加へ
一々御穿鑿有リ平松鳥居ガ鎧ノ儀崩口ノ砌ナレバ
鎧トハ難申去小豆坂志津嵩ノ七本鎧ナドニ較レ
ハ遙カ益ノ働ナルベシ長田傳八池田ヲ討事冥加ニ
叶タリ本多ハ藏森ヲ討ケレ共大將ト知ラデ首ヲ取

リ不_レ来_レ分_レ捕_レノ_レ股指信雄御覽有_レテ無疑城ノ_レ外殿信列
諏訪ニ_レテ森ニ_レ給_レリタル_レ股指関金ナリト宜_レフ由本多
申_レ分_レ其外ノ_レ者共ノ_レ儀一々言上スレバ源君聞召長田
平松鳥居手柄神妙ナリ本多ハ同事ノ_レ働キナレ共森
ヲ討タル事不正信雄ニ_レ股指ヲ見セ是ニ_レテ森ヲ討_レタ
ルト云立ル儀不吟味ナリ森股指ヲ余人ニ_レ出シタラ
バ如何セン森ガ首ヲ不_レ取来上ハ信雄何ト宜_レフ共無_レ
聞入可_レ罷有_レテ證人ノ_レ様ニ_レ申ナス事上方武邊ニ_レ相似
リ我家ノ_レ作法ヲバ不知哉ト仰ケレハ本多兼テ迷惑
シケリ加様ノ_レ働キ一番二番ノ_レ鑓ヲサヘ強ク御詮議
アレハ五本七本ノ_レ鑓ナトノ_レ事ハ申シ出ス者モナシ

惣而上方衆ハ飾ヲ專トシ爰彼七本鑓ナト、申セト
モ御家ニ_レテハ一番二番鑓迄ノ_レ御穿鑿ナリ夫モ鶺殿
渡邊矢田蜂屋寛米津等ノ_レ働キ盛ナル時分ニ
ハ誰ニ_レテモ一番ニ_レ鑓ヲ合セバ二番ノ_レ鑓不_レ珍刀ヲ以
テ鑓前ヲ可切崩ト吟味スルニ付御家ニ_レテ武切ノ_レ者
ト云ハレシ人ハ働ノ_レ場存ノ_レ外多シ如此穿鑿強キ御
家ナルニ_レヨリ少ノ_レ儀ヲバ不_レ申立他邦ヨリ_レ寛ノ_レ者来
リテモ武道ノ_レ沙汰スル事ナラズ結句中川土玄津田
四郎左エ門兄弟如キ惡名ヲ發スルモノ多シ甲州先
方衆御家へ出テ口ヲ_レ聞事ナラサレハ是非何事モ候
者御譜代衆ニ_レ越シ廣言ヲ吐ント互ニ_レ申合ケル由風

聞アレバ御譜代衆モ甲州衆ト敵味方ノ時度々成ヲ
頭シ今膚身ヲ合セ先ヲセラレナバ跡ノ働追無二ナ
シ其上御家ニ疵ヲ作ルニテアリ縦敵味方ノ時ハ後
ヲ取テモ合戦ノ習ヒ勢ノ多少ニヨルナレバ不及是
非欲膚身ヲ合セ越サルハ弓矢ノ上大キナル卑下
ナリ必シモ甲斐國衆ニ先ヲサスルナト呷サヤキケル所
ニ今度ノ一戦ニ御家ノ衆先登高名スレバ甲州衆三
河者ト立合始テノ戦ニ先ヲセラレ口ハ不利ト無念
カル由成瀬藤八郎御前ニテ卒介ニ申出シ甲州衆ヲ
悪キ様ニ云ケレハ内藤正成聞テ夫ハ成瀬無考ノ申
分ナリ甲州衆ナレハコソ近年譜代ノ主ニ離レ無カ

ノ時分大敵ニ向ヒ敗走セス御譜代衆ノ跡ヲ黒メ申
セ上方衆ナラハサソアラン味方原ニテ信長ヨリノ
加勢ノ事ヲ存出サレヨ扱御邊ノ働ハ如何ニト答懸
ル成瀬利口ノ者ナレバ某ハ御咄ノ相手ニテ御座候
故御馬ニ不離罷有指セル高名ヲ不仕貴殿ハ御先ヲ
被懸候哉ト答ケレハ源君聞召内藤高木ハ我カ馬回
ニ指置軍用ヲ相達セシムルニヨリ物見ニ乗出シ渡
邊ニ行逢先陣ノ様子聞届馳歸リ申告ル故能圖ニ懸
テ大敵ヲ追崩ス彼等二人先へ乗出シ候ハスハ渡邊
カ步行ノ告違引得勝利事難カラン内藤高木カ物見
渡邊カ告無シハ此度ノ合戦ハ一大事ナルヘシ汝非

其役推参ナリト怒リ給へハ成瀬赤面シテ御前ヲ立
ケリ渡邊進出申ケルハ水野太郎作旗指北タルヲ太
郎作悪キ様ニ御前ニテ取沙汰アル由申トテ太郎作
事ノ外迷惑仕候太郎作儀足輕塲ニ罷有リ一足モ不
引候旗ハ下人ノ指者ナレバ北タル事モ可有御座其
北タルト申者不審ナリ跡ニ不罷有見ル事成間敷候
又小栗又一郎味方ウロタへ者ニ跡ヨリス子ヲナガ
レ追懸討ント仕レ共急所ヲ切レ不叶シテ取北シ手
負タルニ依テ抜出タル高名ヲモ不仕無面目由申通
委細言上スレバ源君兩人ヲ召出シ度々剛敵ニ逢テ
サへ先陣ヲ懸ケ手柄ヲ盡シ候處ニ況ヤ今度腕キ敵

ニ出合振ノ悪敷事アラジ其方ナドノ穿鑿ヲ遂ルニ
非ズ若キ者共ノ勝劣ヲ吟味スルナリト宣へバ水野
小栗安堵シテ御前ヲ立ケリ其後平松鳥居長田本多
ガ場ニ至リタル輩又池田丹後守が同勢ヲ引付居タ
ル時ノ事細山崎一戦其外ノ儀一々御穿鑿アリ榊原
康政御旗ノ押様悪敷故先陣ノ者多ク討レタル由申
ケレバ寛照重渡邊政綱御旗奉行ナレバ腹立シ康政
ニ向ヒ此度ノ御合戦御旗ヲ能押ケル故御勝利ヲ得
サセラレ候貴殿ナドハ無遠慮長途ヲ追テ敗軍シ其
北来ル所へ御旗ヲ押懸タラバ共ニ追立ラレ御合戦
御員ニ可成ヲ兩人目利能テ横合ニ敵ノ旗本へ懸リ

池田森ヲ討取リ大ニ被得勝利事偏ニ御旗ヲ善道へ
進ル故ナリ不聞儀ヲ被申ト答ケル康政聞テイヤ々
御旗ヲ押詰タラバ取テ返シ池田森ハ不及申堀久太
郎ヲモ可討取ニ御旗ノ押様思キ故能者數多討レ候
何ノ御合戦ニモ御旗本ニテ先手ヲ助給フ間此度ノ
儀ハ兩人ノ不覺ナリト論シケル間守綱忠佐并正信
正成清秀御前へ出テ右ノ段々申上ケル源君聞召シ
康政照重政綱三人ヲ召シ榊原ガ申分モ聞ヘタリ又
兩人ノ旗奉行ガ申處モ聞ヘタリ免角ハ合戦ニ勝テ
敵ヲ討取タル条雙方ナガラ堪忍候ヘト仰ケレバ何
モ可問答様ナク退出シケリ御詮議ハ是迄ニテ終リ

ケリ

滝川蟹江城忍入事付降参事

六月十六日滝川一益尾刈蟹江城乗取ントテ九鬼右
馬允嘉隆ト示合セ兩將三千余騎ヲ引率シ出船ス一
益去年迄ハ北伊勢五郡ヲ領シ長嶋ノ城主タリシカ
越國ノ柴田ト一味ナルニ付信雄身代ヲ没収シ秀吉
ヨリ扶持方領ヲ與ヘ大坂ニ詰サセ置キ玉フ所ニ信
雄鉾楯ニナリ玉ヘハ一益ヲ富田平右衛門ト共ニ勢
刈木造ノ城番ニ遣シ玉フ一益忠勤ヲ抽テ本領安堵
セハヤト思ヒ富田ニハ沙汰ナク蟹江城留主居前田
与十郎正長親類ナレバ彼方へ竊ニ書状ヲ指越シケ

ル城主ハ佐久間右工門尉ガ嫡男駿河守正勝ナリシ
ガ伊勢國加陽ノ城普請ニ信雄ヨリ遣シ給フニ付蟹
江本丸ヲ前田正長ニノ丸ヲ佐久間左京亮信辰
ニ預置ケリ前田ハ母方佐久間ハ父方何モ駿河守伯
父ナリニ心有間敷ト思ヒ預ケル所ニ滝川方ヨリノ
状ニ蟹江へ引入清洲長嶋味方ノ城トスルナラバ前
田ガ門葉一屢却取リ立可被成由秀吉被仰ノ旨委細
申越ケルニヨリ此儀ニ同シ蟹江枝城前田ノ城ニ前
田甚七郎長種下市場ノ城ニ前田与平次長虎々々ハ
弟長種ハ甥ナレバ何モ正長ガ下知ヲ用ル故早々打
立可給旨返報シケル是ニ依テ九鬼ヲ誘ヒ乗出シ明

ル十七日蟹江へ入城シケレバニノ丸ヲ預リ居ケル
佐久間信辰仰点シテ本丸臺所へ懸込正勝カ妻ヲカ
タ付燒草ヲ用意シテ敵奥屋へ乱入セバ城ヲ燒立シ
模様ナリ前田滝川城ヲ燒レテハ不叶ト思ヒ扱ヲ入
信辰ニ正勝ガ妻ヲ渡シ少モ手ザシスマジキ旨堅ク
云合セ正長ガ子ヲ人質ニ越ケレバサラバ立退ント
テ正勝ガ妻ヲ引具シ戸田村指テ退ケリ正勝ガ被官
山口長次郎重政楯籠ル大野ノ城へモ敵船向ヒケル
ヲ重政懸合セ散々ニ戦ヒ小船一二艘燒崩シ不上立
此旨角下信雄へ申達ケリ井伊直政松葉村ニ陣取り
居ケルガ敵海上ヨリ燒勵スルト心得清洲へ注進仕

リ取ル物モ取リアヘズ蟹江ヲ指テ馳行ク所ニ敵過
半入城シテ旗ヲ飾ルニヨリ海上ノ敵ヲ上タテズ城
ト海ノ間ヲ取リ切ント志シ蟹江前田下市場三方ニ
向ヒタル濱邊ヘ懸付南海表ヲバ大柵ヲ丈夫ニ付サ
セ三ツノ城ニ向ヒ備ヲ立テ待居タリ源君早速戸田
へ御出陣アレバ信雄ハ山口方ヨリノ注進ヲ聞キ長
嶋ヲ打立大野ヘ着城シ給フ九鬼嘉隆ハ下市場ヘ上
リケルガ敵陣ノ様子ヲ見考ヘ滝川方ヘ使者ヲ立テ
蟹江菴城叶間敷早々立退給ヘト云遣ヒ端舟ニ乗シ
沖ノ大船ニ乗移リ陸ノ様子ヲ見合セケリ源君ヨリ
信雄ヘ使者ヲ立テ下市場ノ城先攻落シ可然トテ神原

康政岡部正綱并穴山衆ヲ遣シ給ヘバ信雄ヨリ織田
源五信益ヲ大将トシテ山口重政ヲ案内者ニ指添被
越ケル織田神原申合セ同十八日下市場ノ城ヘ押寄
大手手ヘハ神原岡部穴山衆搦手ヘハ信雄ノ勢向ヒ
ケリ大手緊ク攻ケレバ前田長虎防戦不叶裏口ヨリ
切抜ントシケル處ヲ山口ガ郎等竹内喜八郎ト云者
長虎ヲ討取リケリ残ル者共我先々ト退散セシテ
追懸ケ二百余討取リ九鬼ガ甥ノ長兵衛ヲ岡部ガ手
ノ者朝比奈金兵衛生捕、凱歌ヲ唱ヘ城ニハ岡部ヲ籠
置此旨角ト織田神原信雄源君ノ御耳ニ立レバ兩將
事外ノ御機嫌ニテサレバ蟹江ノ城ヲ可攻トテ同ホ

日手分ヲ定メ取巻給フ城ヨリ辰巳ノ方海門寺口ハ
榊原康政丹羽氏次天野雄光是ハ信雄ヨリ北本丸ノ方
ハ水野忠重松平康高植村正勝東二ノ丸ノ方ハ本多
忠勝石川長門守并御旗本弓鉄炮衆西一方ハ信雄ノ
勢打圍ケリ前田ノ城押ニハ石川數正ヲ被仰付瀧川
七百前田勢加テ千不足去レ共武勇ノ切者ナレハ日
置五左エ門滝川彦次郎谷崎忠右エ門ヲ三手ニ分ケ
本城二三ノ丸ヲ堅メ防ケリ同世二日ヨリ持楯竹手
把突寄々々攻入頓テ三ノ丸ヲ取り勢樓ヲ上ケ城中ヲ
目ノ下ニ見テ口シケル本多八藏真先ニ進テ無比類
働キ討死シケリ是ハ長久手ニテ森長可ヲ討ケレ共

御詮議ノ刻不吟味ヲ申上並ノ御感ニ預ル故其ヲ無
念ニ思ヒ深ク攻入討レケリ滝川三ノ丸ヲ取レ菴城
難叶躰ナレバ源君信雄へ御相議有テ無事ヲ作り織
田信益ガ侍鳴海喜太郎ヲ城中へ遣シ給へバ滝川方
ヨソ津田藤三郎ヲ出シ和睦ノ條數ヲ乞ケル前田与
十郎父子ヲ切テ出シ其上滝川以来味方可仕七枚起
請ヲ可書越ノ由仰ケレバ前田此旨ヲ推察シ落支度
セシヲ滝川ガ甥ノ源八郎見付テ討ケリ其首ニ差添
へ起請ヲ上同世七日船ニ乗テ勢州木造ノ城へ歸リ
ケルガ畠田奇恠ニ思ヒ城中へ入ザレバ其ヨリ洛陽
妙心寺へ行函閑ノ躰ニテ日ヲ送りケリ九鬼ハ陸ノ

敵ヲ劫ントシケレ共井伊直政ニ被打立不叶蟹江落
城前ニ伊勢浦指テ逃歸ル前田ノ城ハ石川數正向
ニケルガ前田長種モ籠城不叶濃州指テ落行ケリ源
君信雄蟹江ノ城請取り佐久間ニ渡シ前田下市場不
可然城ナリトテ石川岡部ニ可破却由被仰付兩將清
洲長鳴へ歸城シ給フ

源君信雄勢別御出馬事

七月十一日源君長嶋へ御座シ信雄へ御對面有テ秀
吉近日尾勢兩國へ可癸向ト覺ル也急キ其前方マノ
取出へ加藤指遣可然由御評議アツテ濃州高津駒野
ノ高城方へ榊原康政尾州黒田ノ澤井方へ渡邊半藏

菅沼藤藏二人ヲ指遣給テ信雄ヲ誘引シ衆名へ渡リ
白子神戸ヲ巡見シ松嶋へ加勢ヲ遣シ加陽ノ城普請
出来シケレハ是へモ勢ヲ指越シ給ヒ濱田ニ城ヲ取
立滝川三郎兵衛勝雅ヲ入置キ峯龜山味方ノ城々へ
内通シ方々引付御仕置有テ清洲長鳴へ歸陣有ケリ

秀吉再尾州癸向事

八月廿八日秀吉十万余騎ヲ引具シ尾州河田へ打出
テ取出普請ヲセサセ堀久太郎秀政淺野弥兵衛長政
木村常陸介等ヲ指置其ヨリ高屋へ越キ是ニモ取出
ヲ構へ入番云付稻葉伊豫入道一鉄長谷川藤五郎秀
一ヲ先鋒トシテ下奈良へ押出ケル源君清洲ヨリ三

井重吉へ出張シ取出ヲ拵サセ給へバ信雄ハ郡村へ
打出テ源君ト示合セ日々足輕セリ合シ給フ然ル處
ニ河田ノ取出ヨリ堀久太郎淺野弥兵衛木村常陸介
人數ヲ出シ八幡村大氣村ヲ放火シテ黒田表へ働キ
引取ケル處ヲ渡邊半藏菅沼藤藏下知ヲ以テ黒田ノ
城ニノ丸ニアリケル澤井左エ門佐懸出テ跡勢ニ付
後レ者十四五人討取り引返シケリ秀吉敵陣ヲ破シ
ト計策ヲ回シ給へ共源君信雄堅ク陣ヲ張テ御座ケ
レバ不叶下奈良ヲ要害ニ拵へ稻葉長谷川ヲ籠置キ
樂田ノ陣城へ羽柴小市郎秀勝ヲ入番ニ遣シ十月三
日大垣逆勢ヲ被打納ケリ源君信雄敵遠慮シテ引取
タル由聞召三井重吉ノ取出ニ長澤康重植村正勝郡
村ニハ信雄ノ家来生駒ハ右エ門ヲ残置キ清洲長嶋
へ帰城シ給フ

秀吉与信雄源君和平事

十月十六日秀吉十余騎ヲ引卒シ勢刈衆名郡へ出
張シ衆部直生ニ取手ヲ築キ衆部ニハ蜂須賀小六明
石與四郎生駒甚助直生ニハ蒲生忠三郎氏郷ヲ入番
ト定メ則是ニ陣ヲ張リ町屋川ヲ隔テ衆名中江ヲ取
ント志シ玉へハ源君ハ清洲ニ御座シ酒井忠次ヲ衆
名へ指向一左右次第出馬アラント引玉フ信雄ハ長
島ヨリ中江へ打入松ヶ島濱田加陽ノ取手へ内通シ

酒井ト示合セ矢田山へ勢ヲ出シ川表ノ敵ヲ追拂ン
トシ玉ヲ然ル処ニ秀吉ヨリ近衛時嗣公並大坂天満
ノ門跡願如上人ヲ呼下シ富田平右エ門津田四郎左
衛門ヲ指加へ和睦セラレベキ由被_レ申越ケレバ信雄
是ヲ幸ニシテ源君へ土方勘兵衛ヲ遣シ右ノ趣キ被_レ
仰達ケル源君聞召和平ノ儀不及分別去予ガ事ハ
信長別テ御懇意ニヨリ今度信雄ヲ見次申ナリ秀吉
ニ對シ少モ意趣アラザレバ免モ角モ信雄ノ意次第
ナリト返事シ玉ヲ信雄度々秀吉ノ大軍ニ向事難儀
ニ思ヒ源君御同心ナケレ共高家ノ扱難_モ黙止_シ旨被_レ仰
兩使ヲ召寄明日町屋川原へ出テ盟スベシト約シ被_レ

返明レハ霜月十三日秀吉如何ニモ小勢ニテ出給へ
バ信雄モ出テ對面アリ秀吉膝ヲ屈ノ日比秘藏シ持
タル刀ヲ進シ尾刈一國北伊勢五郡前々ノ如ノ領知
可被_レ成候犬山河田尾口樂田高屋下奈良衆部直生其
外所々ノ取出入番ヲ引候ハン由云テ本陣ニ立歸リ
翌日源君へ富田津田ヲ以テ信雄ト和睦仕ル上ハ別
テ入魂スベシ然レバ家康内室無之様ニ傳聞候我々
妹ヲ人質ナガラ参ラスベキ間御息御義殿ヲ娘子ニ
申請度由被_レ云越ケル源君御家老中御評議有テ信雄
へ被_レ仰通秀吉へ御返事アリケルハ御妹ヲ呼参セ子
息出来タリトモ長丸ヲ指置キ惣領ニハ仕間敷候御

義ヲ親子ニ進ル上ハ以來為證人長九ヲ上方へ御呼
アル共越申間敷候右ノ段於御同心者被仰合相違有
間敷由誓紙ヲ書可被下ノ由被仰達ケル秀吉大ニ悦
テ則誓紙ヲ調へ指遣ヒ人數不殘打納給へバ源君信
雄モ濱松清洲へ歸陣アリ

佐々成政濱松來事並御義丸大坂御上事

十二月四日越中外山ノ城主佐々内藏助成政深雪ヲ
凌キザラ、越へテ經濱松へ參シ秀吉与信雄鉾楯
ノ處ニ惣見寺殿ノ事ヲ不忘給信雄ヲ助ケ長久手ニ
於テ池田森ヲ被打果事實ニ亡君へノ御志シ不可過
之稱以テ信雄ヲ救給ノ為相談罷越ノ由申上ケレバ

源君成政ニ御對面有テ雪中ヲ凌ギ遙々信雄ノ事ヲ
存シ來ル事忠心ノ至リ神妙ナリ乍去信雄早秀吉ト
和睦セラレ予モ亦加勢ニ出ル身ナレバ秀吉ニ對シ
意趣ナキニ依テ扱セシヲ幸ニシテ歸城シケリ加様
ニ頓速和平アルベキト知ルナラバ出陣スマジキ者
ヲト今更後悔スルナリ自今以後佐々モ秀吉ニ從ヒ
尤ナリト仰ケレバ成政カラ落シ源君へ御暇乞申上
濱松ヲ立テ清洲へ立寄信雄ニ見へ越中へ歸リケル
ヲ褒ヌ者ハナカリケリ同十一日御義丸ヲ摂州大坂
へ御上セアリ御供ニハ石川數正ガ次男半三郎本多
重次ガ嫡男丹下并少身ノ侍廿四五人指添被遣ケル

路次ノ警固トシテ本多廣孝ヲ越シ給フ御義丸假初
ニ御寵愛ノ腹ニ誕生アリシ事ナレバ其時分何角ト
御疑有テ重次ニ預置給フ處ニ秀吉親子ニ望ル、ヲ
幸ニシテ遣ハサル秀吉大ニ悦ヒ筒井順慶カ屋形ヲ
明サセ入置キ事外ニ馳走セラレ上方大名ハ八家康
早人質ヲ指上ケル由威勢專ニ申聞給フ

源君秀吉御云入被遣事並御屋作事

天正十三年乙酉正月廿八日源君ヨリ秀吉御妹為御
云入天野康景ニ御小袖御樽肴持セ振列大坂へ指遣
給ヘバ秀吉事外大悦シ様々饗應有テ志津ノ物切レ
刀ナリト宣ヒ出シ被返ケル同二月廿日源君濱松御

城中ニ御主殿屋作旧冬ヨリ被仰付ケルガ早速結構
ニ出来セシトテ加藤喜助榊原小兵衛奉行ナレバ召
出シ呉服銀子ヲ被下ケリ

秀吉根来寺放火事並御妹源君御輿入事

三月十日秀吉數万騎ヲ引率シ中村孫平次ヲ被籠置
ケル泉列岸和田ニ至テ千石堀積善寺濱ノ城ニ紀州
根来寺雜賀一揆ノ輩數多楯籠リ往還ノ者ヲ惱シケ
ルヲ先千石堀へ押寄攻崩シ給ヘバ殘ルニケ所ニ有
之一揆共聞タゲニ退散シケリ秀吉追懸切捨サセ其
ヨリ根来寺へ取懸一時ニ焼拂ニ殘黨悉ク打從へ帰
陣ノ由濱松へ告来ケル同四月十四日秀吉御妹振列

大坂ヲ御立同廿二日遠江國新井へ御下着アリ源君
ノ御家老侍大将衆前坂迄御迎ニ出テケル淺野孫兵
衛富田平右エ門津田四郎左エ門滝川儀太夫伊藤太
郎左エ門ナド御供ニ来リケルガ今切ヲ渡海シ前坂
ニテ淺野御輿ヲ渡セバ酒井忠次式代シテ請取ケル
何モ其ヨリ歸リ淺野計濱松ノ城へ誘引シ様々御馳
走被成拍子^{ハヤシ}三番被仰付御腰物ヲ賜リ返シ給フ

水野石川為御使大坂上事

五月十九日源君水野忠重石川數正御使トシテ御小
袖御樽肴持セ成瀬藤八郎御目付ニ指添撰州大坂へ
遣給フ秀吉御對面有テ色々御馳走被成家康ト縁者

ニナルカラハ天下ノ裁判兩人シテスベシ急キ家康
被致上洛候様ニ各頼入候此儀相調候ハ家康ヲ官
位ニ進メ兩使ニハ一廣所領可宛行間内々左様ニ相
心得候へト堅ク誓言シ給フ忠重數正兼テ加様ニ御
入魂有上ハ家康上洛別儀有間敷旨請負ケル秀吉不
斜悦テ着領ノ草羽織ニカヲ指添賜リ成瀬ニモ呉服
銀子ヲ被下ケリ何モ濱松ニ至リ秀吉仰ノ段一々言
上シケレバ源君如何アラント御遠慮アル處ニ成瀬
藤八郎進出テ忠重數正秀吉ニ欺レ御上リ候様ニ申
上ル間能々御思案可被成由言上シケル源君聞召シ
大臣ノ伯耆守伯父ノ惣兵衛左様ノ事アラジ成瀬不

届ヲ申トテ兩人へノ仕付ニ大樹寺へ追込給フ然ル
處ニ本多重次長子丹下ヲ御義殿ニ付ケ大坂へ遣ヒ
置ケルガ忠重數正欺レ此儀御同心ナクハ又弓矢ニ
可成上洛サへ被成バ官位ニ御進ニ天下ノ事御相談
可有物ヲトツブヤキケルヲ聞キ此分ナラバ頓テ秀
吉ト源君銚楯タルへシト思惟ヲ回シ母ノ煩ニ託シ
濱松へ呼越シケリ

真田敵對事付押寄上田城事

六月十二日北條氏政ヨリ先年約束ノ上列沼田ヲ真
田安房守未相渡間急キ被仰付可被下ノ由氏直内室
ニ付置給フ鴉殿藤助ヲ以テ被申越ケル源君聞召兼

々真田ニ替地ヲ可遣糸渡シ候へト申付ル處ニ只今
迄延引無答ノ様ニ可被思召事迷惑仕候頓テ相渡サ
セ候ハシ間可易御心旨御返事有テ真田カ方へ使節
ヲ被遣何トテ遲々仕候哉急キ可相渡由被仰ケレハ
昌幸兼テ沼田ノ儀ハ家康ヨリモ不被下某手柄ヲ以
テ切取タル地ナリ其上若神子御對陣ノ刻芦田柴田
ヲ以テ被仰下御筋目モ御座候ニ其ニハ御手付モナ
ク沼田ヲ渡シ申セトハ思モ不寄向後ハ家康ヲ主ニ
ハ頼間敷ト切離テ御返事仕ケリ源君聞召シ主ニス
マジキトハ不届ナル申様ナリ其儀ナラバ押寄退治
セヨトテ平岩親吉鳥居元忠大久保忠世柴田康忠芦

田源十郎保科彈正父子岡部弥次郎諏訪安藝守其外
甲斐信濃先方衆合テ七千余騎被指向何モ謀シ合セ
同七月廿六日信州上田ノ城へ押寄苅田ヲシケレ共
城中ヨリ一人モ不出バ扱ハ聞シニモ不似臆シタリ
ト思ヒ慢テ四方ヨリ取巻八月二日二ノ丸迄乱入ス
ル處ヲ真田父子千余騎ニテ思フ圖へ働セ突テ出タ
リ兼テノ手立ニ信濃ノ郷人原ニ紙ノボリヲサ、セ
鉄炮少々加へ四方ノ谷々ニ伏置ケルガ城中関ノ聲
相圖ノ旗ヲ見聞シテ谷々ヨリ聲ヲ合レバ數万ノ敵
前後ニ在様ニ覺へケル爰ヲ引ケト云程コソアレ一
度ニ嘯ト崩カ、ル平岩セノ助大久保七郎右エ門踏

留テ弓鉄炮ノ者ヲ集メ尾崎左門兄弟ト本多主水ニ
殿ヲサセ引退ケル真田緊ク付ケレバ弓鉄炮ノ者操
立ラレ崩ントセシヲ主水乗面シ左門如何ニト言葉
ヲ懸ク左門申ケルハ弓鉄炮ノ者不切ニテ下知ヲ不
聞候へバ押留ル事成間敷候某爰ニテ討死スベシ皆
々引連退キ給へ此由忠世親吉ニ申聞クレヨト云テ
兄弟一處ニ敵ヲ遮リ留メ無比類働討死シケルヲ惜
マヌ者ハナカリケリ其間ニ味方多ク隔テ助リタリ
鳥居元忠ガ一手ハ一段高キ處へ押上コタヘントシ
ケルヲ戸石ノ城ヨリ打テ出押立ラレ己ニ危ク見へ
ケルガ鳥居下知ヲ以テ小見孫七郎其外ノ勇士取テ

返シ鐘ヲ入散々ニ戦ヒ討死スル間ニ鳥居ハ遁レタ
リ芦田柴田岡部保科諏訪其外甲斐信濃先方衆節所
へ被引懸崩レケレバ真田競懸テ追討ニ都合三百余
討取り急キ城中へ引入ル味方モ半途ニテ返シケレ
共二度ノ合戦不叶加賀川ヲ前ニ當テ備ケル酒井与
九郎重勝御使ニ来リ寄手ト共ニ働キ頸一ツ取テ帰
リケレバ後レ口ノ高名ナリトテ各感羨シケリ翌日
大久保七郎右エ門芦田源十郎柴田七九郎保科彈正
諏訪安藝守岡部弥次郎其外信州先方衆申合セ丸子
ノ城へ可働トテ上田ヨリ小室へノ本道ヲバ平岩鳥
居ニ押サセ筑摩川ヲ越へ八重原へ押上ケレバ真田

城ヨリ十町計張出シ陣ヲ取テ足輕ヲ懸サセケル各
丸子へノ働ヲヤメ真田ヲ討ントテ八重原ニ相陣ヲ
取テ透間ヲ窺フ或時柴田岡部物見番ノ日真田父子
足輕ニ交テ柴田ガ手先へ混々ト付康忠取合セ戦ヒ
ケルガ雜兵跡ヨリ旗ヲ捨テ退ケル岡部ハ駿河先方
ノ軍人究竟ノ兵數多持ケレバ柴田ガ跡ヨリ懸ラバ
引立タル者ニ紛レ惡シカリナン川へ人數ヲ入テ堤
陰ヨリ敵ノ真中へ懸ラント下知シ真田ガ足輕ノ後
へ上ル昌幸柴田ヲバ打捨テ岡部長盛カ手へ突テ懸
ル長盛時ノ軍ト思ヒ士卒ニ先立テ兼出ス岡部ガ先
陣松山宗藏所藤内千野千仝安藤平太夫等ヲ始トシテ

皆々鑓袞ヲ作テ懸ル真田方ニモ主ヲ打セジト走り
出テ鑓ヲ合ケルガ所藤内安藤平太千野千介鑓下ノ
高名シ松山宗藏岡部ト共ニ諸卒ヲ下知シ兼回シ柴
田康忠跡ヨリ返シ進メバサシモノ真田モ不叶一町
余リ引退ク子息ノ信幸無念ニヤアリケン又懸ラン
ト兼回シケルヲ安房守制シ止メ軍ハ是迄ナリ引取
レトテ打入ケリ此由岡部方ヨリ濱松へ注進シケレ
バ榊原康政カ組下ナルニ付一々言上ス源君聞召度
々我が先懸ヲシテ戦切アリシ者共ガ敵ヲ慢リ味方
多ク打セケルニ岡部ハ此比ノ窄人若キ者ニテ諸將
ニ抽テ能働タリト被仰何モ御譜代衆ノツラ打ニ榊

原ガ与力頭村上弥右エ門ニ御感状ヲ持セ岡部ガ方
へ被遣ケル惣而御譜代衆ニハ何程ノ働ヲシタルト
テモ御感状ヲバ不被下岡衆並他邦新参ノ輩ニハ賜
ル故斯ク出シ玉フ

今度於九子表身手ヲ碎働之儀感入候殊ニ其方家
中之者共無比類之由是又神妙候即首尾合者等感
状遣シ候弥無油断軍中專一ニ候尚村上弥右エ門
尉可申候謹言

後八月廿六日

家康判

岡部弥次郎殿

是ヨリ後懸合ノ戦モナク互ニ陣ヲ堅メ有之由追々

濱松へ聞へケレバサラバ引取り帰レト重テ井伊
兵部少輔松平五郎左エ門同周防守牧野右馬允ヲ指
遣給フ何モ早々馳参シ先陣ノ輩ト示合セ真田が持
ノ丸子ヲ焼拂其ヲ塩ニシ小室ニ大久保七郎右エ門
芦田源十郎ヲ残シ置其外信濃勢保科諏訪大草知久
遠山下奈等ハ己ガ館ニ留テ真田父子ヲ防キ候ヘト
云含メ皆々一同ニ帰陣シケル真田ハ其ヨリ大坂へ
内通シ秀吉ニ從ヒシナリ

本多正信忠言事付石川數正上方立退事

九月十三夜本多弥八郎正信御月見ノ刻源君ノ御前
へ出テ酒ニ酔タル振ヲシテ申上ケルハ去ル七月秀

吉御舎弟美濃守秀長ヲ大将トシテ四國へ指向長宗
我部ヲ打從へ其身ハ関白ニ任シ先月ハ方々所替ヲ
被仰付和州紀州兩國ヲ四國退治ノ御褒美トシテ秀
長へ遣ヒ郡山ニ在城セシメ和州ノ筒井四郎へハ伊
賀一國ヲ替地ニ被出江州ヲバ羽柴秀次へ宛行ヒハ
幡山ニ居城ヲ構サセ給フ土佐一國長宗我部元親ニ
許シ伊豫國ヲバ毛利輝元へ付与セラル阿州ヲバ蜂
須賀小六ニ給ル讃岐へハ仙石權兵衛其外小身ノ侍
二三人指添被越ケル淡路ヲバ脇坂甚内加藤孫六ニ
出シ給フ和泉ニハ木本孫兵衛ヲ被指置但馬ヲバ前
野庄右エ門赤松弥三郎朋石与四郎別所孫右エ門四

人ニ分遣シ給フ幡摩ヲバ過半近習ノ侍ニ出シ龍野ノ城ニハ福嶋左工門太夫三木ノ城ニハ中河藤兵衛尉明石ニハ高山右近ヲ被指置攝別ヲモ大方近習ノ侍ニ分与ヘ給フ若狹ヘハ惟任^{ミコシラ}五郎左工門尉ヲ被遣ケル其故ハ父五郎左工門長秀死去ノ刻越前大國ナリ大事ノ境目若輩トシテ相守リガタシ別國ヲ可被下由ノ遺言ニ任セ如此被仰付越前ノ内三十万石堀久太郎十五万石長谷川藤五郎五万石木村隼人正五万石蜂屋出羽守ニ割与ヘラル能登一國加賀半國前田又左工門尉越中ハ佐々内藏助兼領ナレ共秀吉ニ歎ヲナス故僅一郡ヲ免賜シ殘ル所前田ク息孫四郎

ニ宛行給フ飛驒國ヲバ佐藤六左工門ニ被遣淺野孫兵衛増田右工門尉石田治部少輔長束大藏大輔前田徳善院ヲ五奉行卜定ノ則徳善院ヲ京都所司代トシテ天下ノ政務執行セ未從國々切治シ與意ト相見ヘ候追付御上洛可被成ノ旨関白殿ヨリ可申奉ト覺ルナリ其時御違背候ハバ鉾楯ニナルベシ御同心候ハバ在大坂セシノ^{ナヒカレロ}蔑ニアテガヒ候ハン間アナタヨリ不被仰越以前ニ御上洛被成カ又御手切アラント思召バ其御考ヘ只今ヨリ被遊御内ノ者ニモ御心ヲ許シ不給ガ能候ハント一々書付ヲ以テ言上シケルハ石川伯耆守関白殿ニ被引付内證ヲホノ聞タルニ依テ

右ノ通り申上ケル源君聞召正信跂脚ニテ無男ナレ
共知恵才覚ハ諸人ニ越ヘタリ大方此積ハヅレ間敷
ト思召シ予モ其心得有テ方々へ手遣スル間氣遣仕
間敷昔被仰談ケリ同十月三日秀吉公ヨリ石川敷正
方へ去ル七月関白ニ任シ天下ノ政事執行候間萬ッ
御仕置為御相談急キ家康大坂へ参勤被申候様ニ異
見アルへシ兼々申合候筋目被違候哉只今迄延引不
審ナル由被仰越ケレバ敷正迷惑仕リ前廣源君へ様
々申上ケレ共無御合点剃成瀬ニ諛セラレ御前ヨカ
ラズ秀吉公ヨリハ加様ニ催促セラレ如何セント案
シ煩ケルガ折節敷正妻子ヲ濱松へ引越置候へノ由

御談ニ付我が心中ヲ御疑被成ト思ヒ此上ハ御家ニ
罷有墓々敷事アラジト思案シテ秀吉公へ立退ン由
申遣ヒ小笠原右近太夫貞慶ガ子幸松ヲ連レ十一月
十三日濱松へ越ト云テ岡崎ヲ出テ矢作川ヲ越シ上
方へ立退ケリ此由吉田濱松へ注進アリケレバ酒井
忠次吉田ヨリ夜通シ岡崎へ懸付堅固ニ城ヲ守護シ
ケリ源君翌十四日ノ晚濱松ヨリ御座シ酒井ニ御對
面有テ早速是へ懸付ル奈神妙ノ至リナリ敷正爰ヲ
立退事何様ノ手立アルモ難計西三河國衆ノ人質
ヲ取リ當城普譜申付互シカラン昔仰ケレバ忠次兼
テ御談ノ通可然由申上則内田全阿弥ヲ以テ先敷正

カ縁者酒井忠行數正内藤家長數正か人質ヲ指上サ
セ其外方々ノ人質ヲ取テ濱松へ遣シ鴉殿善六郎渡
邊六左エ門ヲ御普請奉行ニ被仰付爰彼虎口舛形堀
多門建修セラレケリ然ル處ニ水野忠重石川ト一度
ニ秀吉へ御使ニ参リ云合ノ筋目違ケレバ源君へ見
ル事モナラズ又數正ト共ニ上方へ立退儀モ無云甲
斐思ニ其段酒井ガ方へ申通シ頭ヲ剃テ芴屋ノ城へ
引込ケリ成瀬藤八郎大樹寺ヨリ飛出テ申サヌ事カ
歎ニナツタリト源君ノ御前へ出テ廣言ヲ吐ケル同
廿九日ノ夜大地震尾刈海東郡ノ小城共大方不殘破
損中ニモ蟹江ノ城跡形モナクユリ沉メ長嶋ノ天主

崩レ落其ヨリ年ヲ越へ切々地震シ岡崎ノ城ニモ破
損出来シケレバ則兩奉行申付ケリ源君本多重次ヲ
召シ予若年ノ比ヨリ汝カ忠切他ニ異ナリ就其今度
岡崎本城ヲ預候条秀吉若シ人數ヲ出サバ西三河ノ
一勢指添先手申付池鯉鮒野ニ於テ合戦スベシ内々左
様ニ相心得候へノ由被仰彼ガ子丹下成重ヲ呼出シ
作左エ門忠節人タルノ間書簡ヲ遣スへシ作左エ門
名付ニ可被成候へ共年寄候条其方名付ニ被成ト仰
有テ御手ヅカラ被下ケル次ニ内藤弥次右エ門ヲ召
シ數正縁者ニテ一味不仕跡ニ留ル事堅キ所存ノ者
ナル間石川ガ与力百三十騎安藤次右エ門加藤又左

工門兩組頭共ニ御預岡崎ニノ丸ニ被指置ノ奈萬事
本多ト示合尤ノ由被仰付濱松へ歸城シ給フ扱又石
川ニハ秀吉ヨリ江州ニテ二万石和泉ニテ三千石ノ
領知被宛行ケレ共跡ニ留ル一門縁者ハ不及申御譜
代衆散々愚口シ少モ不羨又上方ニテモ逆意ノ者ナ
リトテソコ、ニアヒシラヒケレハ京童一首ノ歌
ヲ讀テ過ニ立タリ

徳川ノ家ニ傳ルフルホウキ今ハ都ノ木ノ下ヲハク

源君被叙參議事

天正十四年丙戌正月五日源君參議ニ任ジ同日從三位ニ叙ラレケリ秀吉公御妹婿ナルヲ下官ニシテ置

給フ事如何ナリト被仰官位ヲ進メ給フガ御内意ハ
石川伯耆守上方へ立退源君御腹立有テ何様ノ儀可
被思召立モ難計御遠慮ニテ御心ヲ宥メ官位ノ御禮
ニ御上洛ヲ招給シガ為トゾ聞ヘシ源君居ナガラ參
議ニ任スル事難有仕合ナリトテ事外悦給フ

信州侍意變屬関白殿旗下事

二月十八日信州深志ノ小笠原右近太夫貞慶上方へ
立退石川敷正ヲ使リ秀吉公へ見ヘケル是ハ先年武
田滅亡ノ刻窄々ノ身トナリシヲ信長薨去ノ以後源
君本地令安堵給フニ付息幸松ヲ人質ニ指上置ケル
ヲ敷正旧冬岡崎ヲ立退シ時召連大坂へ參ルニヨリ

俄ニ意變シ秀吉公ニ從フソレノミナラズ平居波合
下條ナドモ秀吉公ノ旗下ニ屬セント内通シケレバ
石川ガ覺悟ヲ以テ皆々加様ナリト一入御惡ミ増ケ
リ

駿府御住所取立事並平居波合下條御成敗事

三月九日源君駿府ニ御住所ヲ可被定トテ石川日向
守本多弥八郎内藤四郎左エ門渡邊半藏天野清兵衛
並内田全阿弥ヲ御供ニ被召連彼地ニ至テ今川ノ旧
跡御覽有テ御城構繩張遊シ侍小路町割迄被成高力
与左エ門天野清兵衛加藤喜助内藤甚五郎ヲ普請奉
行ニ被仰付濱松へ歸城シ給フ同五月十六日信州伊

那ノ郡代菅沼定勝方ヨリ平居玄番波合備前下條西
方助同監物ナド成敗仕ノ由注進申上ケリ是ハ何モ
信州侍ニテ伊那ノ近所ニアリケルガ去ル春秀吉公
へ從ヒ候ハン旨内通スル由御耳ニ立ケレバ榊原康
政ガ与力村上弥右エ門ヲ御檢使トシテ右ノ通り定
勝ニ被仰付ケリ

陽光院薨逝事

七月廿四日正親町院ノ御子薨逝シ給ヒ陽光院ト申
奉ル御果報御座ナクテ終ニ帝位ヲ踐セ玉ハ子バ正
親町院ノ御嘆申モ中々愚ナリ秀吉公モ禁中ヲ建修
シ天子ヲ崇メ給テ此親王ヲ御位ニ即奉ントシ玉フ

ニ俄ニ失サセ給ヘハ共ニ悲嘆シ陽光院ノ宮親王ヲ
御即位アラント正親町院ノ御心ヲ尉ノ奉リ給フ

源君御上洛事並駿府御移徙事

八月二日源君濱松ヨリ三州岡崎へ御座シ御鷹野被
成所ニ秀吉公ヨリ淺野孫兵衛富田平右エ門ヲ御使
トシテ急キ上洛可有天下ノ政事御相談有度ノ旨被
仰入ケレバ源君兩使ニ御對面有テ秀吉ノ御母堂大
政所ヲ人質ニ被越其上信列深志ノ小笠原ヲ此方へ
給リ候ハ、可罷登左ナクハ思モ不寄ト仰ケル兩使
兼テ小笠原ガ事御同心可有大政所御下向ノ儀御合
点アラジ別ノ人質御望可然奉存由重テ申上レバ源

君聞召シ何ト云フトモ大政所ヲ御下シナクハ上洛
スマジキナリ是ヲ腹立候テ御出勢ニ於テハ不及是
非尾三ノ塚へ鷹一居ニテ罷出テ上方へ御供仕シ旨
能々相心得可給由被仰ケレバ淺野富田舌ヲ卷キ大
坂へ歸リ此由一々言上ス秀吉公人ノ思フト違母ヲ
人質ニ所望ノ事何ヨリ以テ安キ儀ナリ早々指越シ
ト宣フ羽柴秀長是ヲ聞キ関白ノ母堂ヲ人質ニ遣ス
事末世迄ノ誹謗アルベシ只弓矢ニ被成可被打果由
被申ケレバ秀吉公大ニ笑テ其迫心故弟ニハ生レケ
ル親ヲ顧ズメ天下ヲ治ルハ高祖ノ武勇ニアラズヤ
我ニ任セ候ヘト宣テ大政所へ御断被仰淺野富田ヲ

三州へ下シ御望ノ通りニ可被成由仰ケル源君其儀
ナラバ人質御下着次第無相違可罷登由御返事有テ
御上洛ノ御用意ヲ被成ケル其節駿府淺間ノ宮ニ御
奇瑞アリケレバ先年此宮放火シ一度建修スベキト
志シ候へ共乱世故只今迫達引新宮ノ神主左近將監
兼々造宮ノ儀訴訟旁以テ可被仰付候間御分國へ回
文ノ朱印可遣卜仰有テ如雪齋内由全阿弥ヲ召シ御
朱印御調へ神主方へ被遣ケリ

就駿河在國以奇瑞淺間造宮勸進事

右分國中不撰貴賤在家一間八木壹升宛可出之但
別而奉加之事者可任其志者也仍如件

天正十四年

九月十五日

御朱印 駿河國中

右ノ御文言ニテ甲斐信濃三河遠江四ヶ國へモ御出
アリ同十七日大政所富田平右工門津田四郎左工門
本下半右工門ヲ御供ニ被召連三州岡崎へ着御アリ
源君悦ヒ給テ本丸へ入奉リ井伊直政本多重次大久
保忠世三人ニ御預ケ若シ不慮モアラバ稅物ニ懸ケ
秀吉妹ヲバ上方へ送り酒井左工門尉平岩七ノ助松
平五郎左工門榊原小平太鳥居彦右工門菅沼小大膳
内藤四郎左工門高木主水渡邊半藏大久保次右工門

其外侍大將覺ノ者共申合セ御長ヲ可守立由仰有テ
同十九日富田平右工門ノ案内者トシテ石川日向守
本多平八郎同弥八郎大久保新十郎天野三郎兵衛菅
沼藤藏加々凡甚十郎並外様ノ大名御馬回衆數多御
供ニ被_レ召連岡崎ヲ打立同廿六日撰州大坂へ御著秀
吉公ヨリ羽柴美濃守屋敷ヲ馳走場トシテ明置キ給
へハ則是へ入セ給フ秀吉公頃テ御出在テ上洛ノ儀
悦ヒ思召ノ由被_レ仰明日居城ニテ可懸御目候へ共未
御草卧ニテ可有明後廿八日登城尤ナリ然レバ出仕
ノ禮式官位ノ通りニ仕度候へ共家康内存難計由如
何ニモ謹テ無_レ他事仰ケレバソレハ御意迄モ候ハズ

何様ニモ御指圖次第ニ可_レ仕由被_レ仰ケル秀吉公忝昔
被_レ仰帰城有テ諸大名へ觸遣シ廿八日長袴ニテ御禮
ヲ請給フ源君御音信ハ御小袖拾綿三百把蠟燭五百
挺黄金二十枚太刀目錄ナリ関白殿御城大廣間上段
ニ御座シケレバ源君如何ニモ謹テ御禮ヲ被_レ仰上ケ
ル諸大名是ヲ見テ家康出仕アラハ御對座ヲモ可被
成ト思シニ案ニ相違シ目ヲ驚シ面々ノアヒシラヒ
古へハ傍輩ナリトテ大形ナリシガ今日ノ様子ニヨ
リ翌日ヨリハ匍屈ミケル有様中々目モアテラレヌ
風情ナリ源君御帰宿アレバ淺野弥兵衛ヲ御使トシ
テ御樽肴被_レ進目出度旨賀シ給ヒケリ十月一日於御

城御振舞御能五番被仰付様々ノ御馳走アリ同日
中納言ニ任ジ天下ノ制法萬事御相談被成ケル源君
イツマテモ御逗留可被成ト仰ケルヲ関白殿御老中
ヲ召シ家康國ノ者共危ニ可思其上本多作左衛門岡
崎ノ城大手ニ薪ヲ山ノ如クニ積ミ夜回昼回シテ家
康若シ不慮ノ事アラバ一人モ不遁^ヒ杭物ニ上火アブ
リニスベシト女房共ニ云聞セラドシケル由木下方
ヨリ毎日此方へ申越ス政所ヨリノ御状御迷惑ノ躰
ニ候間急キ下シ候ハント仰有テ源君ノ御宿所へ又
出御被成色々御懇意ニテ貞宗ノ御股指ヲ手ヅカラ
被進御暇乞遊シ御歸リ無程富田ヲ御使トシテ御小

袖二十羅紗五間銀子三百枚御馬一疋御鷹二連送り
給フ源君泰由御禮被仰上頓テ岡崎へ歸リ給へバ五
ヶ國ノ侍共悦事無限叔秀吉公ノ御母堂善尽シ羨盡
シ御馳走有テ井伊直政ヲ今度ノ御禮ナガラ指添木
下ニ呉服銀子ヲ給リ上方へ送セラレ十月廿四日濱
松へ歸城アリ大政所大坂へ御越シ秀吉公ニ御對面
被成本多ガラドシケルウサツラサ御咄笑セ給フ関
白殿直政ヲ召出シ叔モ善キ器量カナ家康取リ立程
アリ長久手ニテ先手仕リ人々ニ深ミラレシモ理ゾ
カシ我秘藏シ持タル道具ナレ共家康馳走ノ直政ナ
レバ出候ト宣テ世上ニカクレナキ大物切信國ノ刀

ヲ賜ル直政頂戴シテ帰リ此由源君へ言上シケル同
十一月三日吉日ナリトテ濱松ヨリ駿府新御殿へ御
移徙アリ侍大将物頭少身ノ輩兼テヨリ屋作仕リケル
者共ハ大形不殘引越ケリ

御即位事

十一月七日関白秀吉公御異見ニヨリ正親町院御脱
履有テ同廿五日當今十六歳ニテ御即位アリ新造宮
殿金銀ヲ鏤メ萬事ノ儀式美麗ナリシカハ正親院ノ
御即位ニ様替リテ諸人耳目ヲ驚シ都鄙遠境ニ至マ
テ其繁栄ヲ傳聞尊敬セスト云事ナシ天子秀吉公ノ
勲功ヲ賞シ大政大臣ニ任シ亦藤原ノ姓ヲ改テ豊臣

ノ姓ヲ賜リシカハ是ヨリ一門他家ノ大名小名ニ赦
シ旧姓ヲ改メ豊臣ノ姓ニソ成ニケリ

東照記卷第十八終



